

まちづくりと共に歩むこれからの学校教育

～子ども参画型まちづくりに見るESDの推進と持続可能な地域社会の創造に関する研究～

横浜市立大学大学 大学院
都市社会文化研究科
主研究指導教員 三輪 律江
横浜市立羽沢小学校 山本功次郎

I 研究の概要

1 研究の背景と動機

社会を取り巻く状況を視野に入れ、地域と協働しながら次代を担う子どもたちを育てていくことは、学校教育に課せられた今日的な課題の一つである。学習指導要領においても「持続可能な社会の創り手」となる子どもたちを育てることが明示されており、「社会に開かれた教育課程」はこれからの学校教育に通底する基本の理念である。一方地域社会に目を向けると、人口減少や超高齢化といった大きな変化に直面し、都市計画の変革とともにまちづくりに市民が主体的に参画することへの期待が高まっている。

「社会に開かれた学校教育」と「市民参画型まちづくり」という学校と地域社会を取り巻く2つの課題を考えたときに、これらを持続可能な地域社会の創造という共通の目的で総合的に捉え、双方向的な役割や価値を見出しながら相乗的に効果を上げていくことの必要性を感じ、本研究主題を設定した。

2 研究の目的

本研究では、学校教育において子どもたちがまちづくりに参画することの価値を、教育効果や社会貢献といった視点から明らかにし、「まちづくりと共に歩むこれからの学校教育」の実現を目指していく。

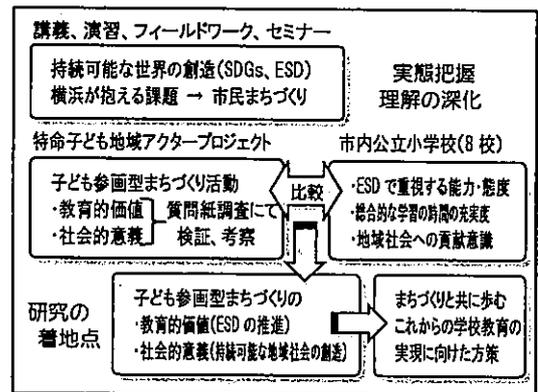
本研究を通して、学校教育の充実と地域社会の発展が双方向的に豊かな関わりを実現したとき、地域の抱えている課題の解決のみならず、持続可能な社会を創造する子どもたちの資質・能力の育成、また、双方の連携や協働が生み出す持続可能な地域社会の創造に役立つことを期待している。

3 研究の方法

まずは、大学の講義及び演習、関係各所へのフィールドワーク、各種セミナーへの参加、関連する文献の調査研究や先行実践の分析を通して、まちづくりやESDについての研鑽を積み、社会が直面している様々な問題や持続可能な地域社会の創造についての理解を深めていく。

次に、NPO 法人ミニシティ・プラスが主管する子ども参画型まちづくり事業「特命子ども地域アクタープロジェクト」の活動や市内ESD推進校やユネスコスクールを取組、さらには、地域の材を活かしながら総合的な学習の時間の充実を図っている学校への取材、調査、比較、検証を行い、子どもたちが地域社会に参画することの教育的な価値や社会的な意義について考えていく。

それぞれの取組の共通点や相違点を検証する中で、市民活動の中で行われている「子ども参加型まちづくり」から学校教育に応用できる部分を明らかにし、ESDの推進や総合的な学習の時間の充実及び学校・地域コーディネーターの役割、学校における働き方改革等について考察を重ね、「まちづくりと共に歩むこれからの学校教育」の一方案を示していきたい。(図1)



II 持続可能な世界の創造に向けて

1 持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals)

(1) 世界の動向 ～SDGsの誕生～

地球規模の人口増加や環境破壊が進む今日、我々人類は、持続可能な開発に対する大きな課題に直面している。貧困や紛争、それに伴う差別や人道危機、食糧不足や自然災害、深刻な気候変動等、目の前に山積された課題は、もはや一部の国や地域が努力すれば解決できるものではなく、世界的な共通理解のもと各国が手を組み、具体的な行動を起こさなければならない状況が続いている。



図2:「SDGsロゴ」国際連合広報センター

地球規模の課題が山積する中、2015年の「国連持続可能な開発サミット」において、「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。この行動計画の目標として掲げられたのが「持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)」である。SDGsは「誰一人取り残さない-No one will be left behind」という理念のもと、①貧困、②飢餓、③保健、④教育、⑤ジェンダー、⑥水・衛生、⑦エネルギー、⑧経済成長と雇用、⑨インフラ・産業化、⑩各国間の不平等、⑪都市と居住、⑫生産と消費、⑬気候変動、⑭海洋資源、⑮生物多様性、⑯平和、⑰パートナーシップといった17の目標と169のターゲットからなる全ての国を対象とした普遍的な国際開発目標である。

表1:持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)

No.	アイコン	内容
1	貧困をなくそう	あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる
2	飢餓をゼロに	飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養の改善を実現し、持続可能な農業を促進する
3	すべての人に健康と福祉を	あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する
4	質の高い教育をみんなに	すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する
5	ジェンダー平等を実現しよう	ジェンダー平等を達成し、すべての女性及び女児の能力強化を行う
6	安全な水とトイレを世界中に	すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する
7	エネルギーをみんなにそしてクリーンに	すべての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的エネルギーへのアクセスを確保する
8	働きがいも経済成長も	包摂的かつ持続可能な経済成長及びすべての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用(ディーセント・ワーク)を促進する
9	産業と技術革新の基盤をつくろう	強靱(レジリエント)なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る
10	人や国の不平等をなくそう	国内及び各国間での不平等を是正する
11	住み続けられるまちづくりを	包摂的で安全かつ強靱(レジリエント)で持続可能な都市及び人間居住を実現する
12	つくる責任 つかう責任	持続可能な消費生産形態を確保する
13	気候変動に具体的な対策を	気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる
14	海の豊かさを守ろう	持続可能な開発のために、海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する
15	陸の豊かさを守ろう	陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。
16	平和と公正をすべての人に	持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する
17	パートナーシップで目標を達成しよう	持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する

(2) 国内の動向 ～環境未来都市から SDGs 未来都市へ～

このような世界の状況を受け、我が国でも、関係省庁が連携し政府一体となった取組を可能にする「持続可能な開発目標推進本部」を内閣に設置し、「SDGs 実施指針」を策定した。さらに2017年には「SDGs アクションプラン2018」において官民による主要な取組について発信し、SDGsと連動する Society 5.0の推進やSDGsを原動力とした地方創生といった方向で、日本の「SDGsモデル」の構築を目指している。また政府は、人間中心の新たな価値を創造する都市を目指す「環境未来都市」構想を更に発展させ、新たにSDGsの手法を取り入れた「SDGs未来都市」を通して戦略的にSDGsを進めていくとし、29の自治体を選定。さらにその中から横浜市を含む10のモデル事業を「自治体SDGsモデル事業」とし、上限4千万円の補助金制度を設けた。

横浜市は、2018年6月に「SDGs未来都市」及び「自治体SDGsモデル事業」に選定され、環境を軸に、経済や文化芸術による新たな価値を創出し続ける都市の実現を目指している。その具体的な方策として、環境・経済・社会各分野の取組の相互連携を図り、価値を高め、都市のプレゼンス向上につながる仕組となる「SDGsデザインセンター(仮称)」を公民連携により創設するとしている。

(3) 社会におけるSDGsの広がり

国内外においてSDGsへの取組が進められる中、いち早くこの潮流に反応したのは、経済界や民間企業である。これは、SDGsが各国の政府のみならず、民間企業やNGO団体等を活動の主体に想定しているためであると考えられる。2015年のアジェンダにおいても、「我々は、こうした民間セクターに対し、持続可能な開発目標における課題解決のための創造性とイノベーションを発揮することを求める。」と記されており、民間セクターの創造性とイノベーションへの期待の高さが伺える。

今日、SDGsは大きなビジネスチャンスを含んでいると言っても過言ではなく、既に欧米のグローバル企業はSDGsへの具体的な取り組みを経営課題に組み込んでいる。日本国内においてもCSR(企業の社会的責任: Corporate Social Responsibility)の核として位置付け、SDGsは共通言語になりつつあるが、その認知度は15%弱(電通2018)と言われており、まだまだ一般的とは言い難い状況である。

2 持続可能な開発のための教育 (ESD: Education for Sustainable Development)

(1) ESD の誕生と日本の役割

世界各国で、SDGs 達成に向けての動きが活発になる中、それと並行する形で「持続可能な開発のための教育 (ESD: Education for Sustainable Development)」に対する期待と必要性が高まってきた。ESD を世界的に進めていくために、国連は 2002 年の総会において、2005 年から 2014 年までを「持続可能な開発のための教育の 10 年 (ESD の 10 年)」とすることを採択したが、この時決議案を提出したのは、他でもない日本政府であった。これはすなわち、全世界に向けて ESD の必要性を唱え、推進の旗振り役を行ったのが日本であり、我が国が、各国に先駆けて ESD の充実を図り、先導していく役割を担っていることを示している。日本政府と NGO の共同提案から生まれた「ESD の 10 年」は世界で展開され、国連は、ユネスコを ESD 推進の主導機関として指名し、日本国内でも、政府、学校、高等教育機関、NGO/NPO、企業等、様々な主体による ESD の取組が始まった。

国連持続可能な開発会議 (2012) では、「ESD を促進すること及び『ESD の 10 年』以降も持続可能な開発をより積極的に教育に統合していくことを決意すること」が合意され、それを受けて国連は、2015 年からの ESD 推進の枠組みとして「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム (GAP)」を採択した。このように ESD は、2015 年に国連で採択された世界共通の目標である SDGs 達成のためにも、重要な役割を果たすことになった。

(2) ESD (持続可能な開発のための教育) の概要

今日 ESD は「持続可能な開発のための教育」と訳されるが、我々日本人が「開発」と聞くと、未開の地を切り開いて開拓することや人類の生活をより豊かにしていく発展的な意味合いを含んで解釈されるところがあり、その本質についての理解を難しくしているように思うところがある。しかし、環境保護等の地球規模の課題と開発は、決して相反するものではない。ESD についてユネスコは次のように説明し、「ESD は持続可能な社会づくりの担い手を育む教育」と定義している。

表2:ユネスコによる ESD の定義

現在、世界には、環境・貧困・人権・平和・開発といった様々な地球規模の課題があります。ESD とは、地球に存在する人間を含めた命ある生物が、遠い未来までその営みを続けていくために、これらの課題を自らの問題として捉え、一人ひとりが自分にできることを考え、実践していくこと(think globally, act locally)を身につけ、課題解決につながる価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。つまり、ESD は持続可能な社会づくりの担い手を育む教育です。

日本ユネスコ国内委員会

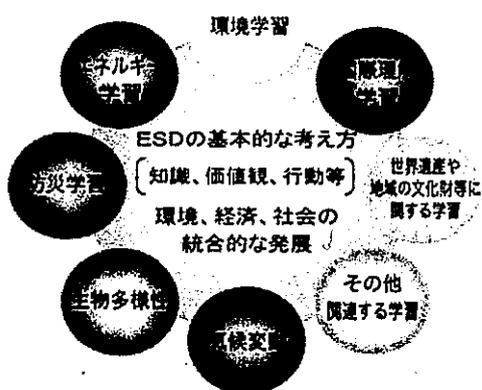


図3: ESD の基本的な考え方

図2に記されている様々な地球規模の課題に対するアプローチは、教育現場にとって目新しいものではない。環境教育、人権教育、平和教育は、どれも聞き馴染みのある言葉であり、これまでも学校教育の様々な場面で繰り返し実践されてきた。しかしながら、個々の課題だけを取り上げて課題教育の充実を図っても、それだけでは持続可能性の問題が解決できない状況が続いている。これはすなわち、これらの実践を ESD という新たなフィルターを通して捉え直すことで、それぞれ独立していた個別分野の取組に、持続可能な社会の創造という共通の目的を与えることの必要性を表していると言える。既存の取組であっても、ベクトルを共有し横断的に結び付けることで、より一層の充実や発展が期待できるのである。

(3) ESD が目指していること (学校教育との共通点)

次に ESD が目指していることに着目し、学校教育との共通点について考える。日本ユネスコ国内委員会が作成した資料に加え、国立教育政策研究所が行った ESD に関する先行研究及び 2017 年に改訂された新学習指導要領の 3 つの資料を比較してみる。(表 3)

II-2-(2)同様、ここでも学校教育との共通点は多く、特にユネスコの示す「ESD で育みたい力」の全ての項目が、2017 年 3 月に公示された学習指導要領の総則においても、子どもたちに身に付けさせたい汎用的な資質・能力として挙げられている。また、国立教育政策研究所の ESD 先行研究「学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究 [最終報告書]」の「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度 (例)」の中でも、同様の内容が示されており、ESD が目指していることと今後の学校教育が目指していることは、「育成したい力」という教育の根幹部分で共通していると言える。

表3:「ユネスコスクールと持続可能な開発のための教育(ESD)今日よりいいアースへの学び」日本ユネスコ国内委員会

ESDの目標	ESD実施に必要な観点	ESDで育みたい力	ESDの学び方・教え方
<ul style="list-style-type: none"> すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること 持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと 	<ul style="list-style-type: none"> 人格の発達や、自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと 	<ul style="list-style-type: none"> 持続可能な開発に関する価値観(人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等) 体系的な思考力(問題や現象の背景の理解、多面的で総合的なもの見方) 代替案の思考力(批判力) データや情報の分析能力 コミュニケーション能力 リーダーシップの向上 	<ul style="list-style-type: none"> 「関心の喚起→理解の深化→参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促すという一連の流れの中に位置づけること 単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチをとること 活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すこと

「小学校学習指導要領 総則」解説

「育成したい力」で共通している

「学校におけるESDに関する研究」国立教育政策研究所

育成を目指す資質・能力(第1章第1の3)

(3) 学びに向かう力、人間性等を涵養すること

児童一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくためには、〈中略〉多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するものも幅広く含まれる。

教科等横断的な視点に立った資質・能力(第1章第2の2)

(1) 学習の基盤となる資質・能力

イ 情報活用能力 複数の情報を結びつけて新たな意味を見出す力や、問題の発見・解決等に向けて情報技術を適切かつ効果的に活用する力を身に付けていること。

ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)

- 批判的に考える力
- 未来像を予測して計画を立てる力
- 多面的、総合的に考える力
- コミュニケーションを行う力
- 他者と協力する態度
- つながりを尊重する態度
- 進んで参加する態度

3 学校教育としてのESD

(1) 国を挙げてのESDの広がり

これらの共通点に加え、新学習指導要領の前文及び総則において「持続可能な社会の創り手」の育成が明示されていることは、ESDが新学習指導要領全体において基盤となる理念として組み込まれたことを表している。このような状況を受けて、国内のESDの推進拠点であるユネスコスクールは、急速にその数を増やしており、2018年7月現在、加盟校は幼稚園・小・中・高等学校及び教員養成学校で1149校に上る。(図4) 文部科学省もユネスコスクール同士の交流やユネスコスクール以外の学校へのESDの普及、促進に励んでおり、それを受けて横浜市も2017年「横浜市ESD推進コンソーシアム」を発足した。市内のユネスコスクールやESD推進のモデルとなる学校を支援するために大学、市役所各部署、NPO等がメンバーとなり、ESDの普及に取り組んでいる。

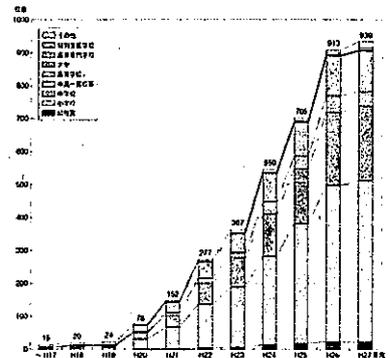


図4: ユネスコスクール加盟校の推移

(2) 横浜市ESD推進コンソーシアム

横浜市は、2010年に横浜市立永田台小学校が初めてユネスコスクールに登録され、全国的にも注目を集めてきた。しかしながら、市内公立小中学校のESDの取組状況は、必ずしも高いとは言えず、横浜市教育委員会は、永田台小学校のような優良事例を他校でも推進するための取組として、平成28年度より、日本ユネスコ国内委員会の支援を得て「横浜市ESD推進コンソーシアム」を立ち上げた。

横浜市ESDコンソーシアムは、横浜市立永田台小学校や横浜市立幸ヶ谷小学校といったユネスコスクール登録校とESD推進校(H28年度=12校)で実践している推進モデルの策定等を支援するとともに、全ての市立学校にESDのノウハウを提供するものである。市内には、小学校が341校、中学校が146校と合計で500校近くあり、その全てで一斉に展開することは難しい。市は、3ヵ年計画で市立学校でのESD取り組みの増加を目指している。(図5)

また、平成30年度に新たに開校した横浜市立みなとみらい本町小学校は、開校宣言及び学校教育目標の中に「持続可能な社会の担い手を育む」という言葉が記されており(表4)、みなとみらい地区の企業と積極的に連携しながら次代の社会を担う子どもたちの育成に力を入れている。



- 多様な組織と連携「横浜市ESDコンソーシアム」構成団体
- ・横浜市教育委員会(代表団体)
 - ・実施校(ユネスコスクール登録校、本事業推進校)
 - ・大学(京都市大学、聖心女子大学、横浜国立大学、横浜市立大学)
 - ・横浜市各部署(環境創造局、温暖化対策推進本部、総務局、スーパード、RCE横浜)
 - ・民間団体等(横浜市資源リサイクル事業協同組合、神奈川県ユネスコスクール協議会、JICA横浜、公益財団法人WWFジャパン、NPO法人開発教育協会/DEAR、市内企業等)

図5: 横浜市ESDコンソーシアム推進体制

表4: みなとみらい本町小学校「開校宣言」

横浜の経済・賑わいの中心であり水と緑と歴史に囲まれた潤いのある都市みなとみらいの豊かな資源を活かし、持続可能な社会の担い手を育む小学校として発展することを期待し、ここに横浜市立みなとみらい本町小学校の開校を宣言します。 平成三十年四月一日 横浜市教育委員会

(3) 学校教育における ESD の現状と課題

国や自治体、ユネスコスクールが中心となって ESD の普及に努めた結果、ESD の視点を取り入れた横断的・総合的な指導の実践は広がりを見せてきた。その結果、学習に対する興味・関心の向上といった子どもたちの意識の変容が見られ、教科横断的な授業実践を通して、授業の質の向上や教職員間の連携が生まれる等、授業改善に繋がっている。しかしながら一方で、学校教育における ESD の推進が十分に進んでいない状況が続いている。2013 年に日本ユネスコ国内委員会がユネスコスクールに実施した調査で

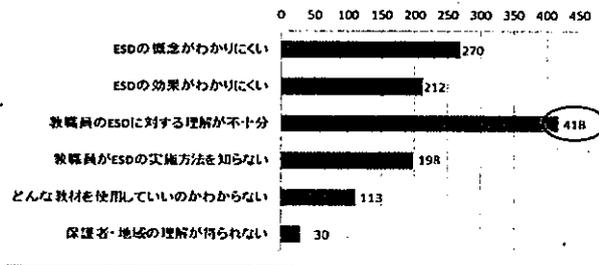


図6: 学校教育において ESD の普及が十分に進まない理由

は、学校教育における ESD の普及が十分に進まない理由として「教職員の ESD に関する理解が不十分」を挙げた学校は全体の 75%、「ESD の概念がわかりにくい」を挙げた学校は約 50% であり、ESD の概念が抽象的で、多岐にわたる分野を包含するものであることが ESD の理解を困難にさせていると指摘している。(図 6) 日本ユネスコ国内委員会は、学校現場における ESD 推進の課題を次のようにまとめた。

表5: 学校現場における ESD 推進の課題

- ESD の概念が抽象的であり、また、環境、平和、国際理解、人権等、多岐にわたる分野を包含するものであることから、一般的に十分に理解を得られているとは言えない。
 - ESD が、既存の教科等で学んだ知識を総合的に活用し、課題の解決に向けて生徒が自ら考え、行動することを促すものであり、教科間のつながりや地域の人とのつながりを大切にしようとする趣旨が十分に理解されず、付加的なものとしてとらえられることが多い。
 - 学校現場でどのような学習活動を行えば良いのかについての十分な情報がなかったり、適切なカリキュラムの編成上の工夫がなされていないこと、体系的・継続的な学習がなされず、ESD 的な活動を行っているにもかかわらず、ESD の目指す資質・能力の育成につながらないことも多い。
 - ESD に熱心な教員がいても、異動等によりその取組が継続されなかったり、校内における理解が十分に得られず、教科横断的な取組が困難となるなど、必ずしも ESD が学校内で組織的に実施されていない。
 - 学校現場での効果的な ESD の実践のためには、教職員の意識・指導力の向上が不可欠であるが、ESD に関する教員研修が十分ではない。
- <日本ユネスコ国内委員会 第3回 ESD 特別分科会配布資料より>

このように、ESD を実施しようとしても、学校現場でどのような学習活動を行えばよいのかについての十分な情報が得られず、現行の学習活動に対する付加的なものとして捉えられている実態が見えてきた。教職員の意識及び指導力向上のための ESD 研修やユネスコスクール間の交流を充実させ、優れた実践事例を効果的に発信、共有できる仕組みやツールを整備することが求められている。

III 横浜をとりまく状況と市民主体のまちづくり

世界有数の貿易港である横浜港の開港と共に発展してきた横浜市は、18 区の行政区からなる政令指定都市であり、日本を代表する国際的な大都市である。総人口 372 万人は全国の市町村の中で最も多く、京浜工業地帯の中核都市というだけでなく、観光都市として、また東京都心のベッドタウンとして発展を遂げてきた。2018 年の開港から 160 年を迎える横浜は、これまでも社会の変化に伴って生まれる課題に対して柔軟に対応してきた。「Think globally, act locally (地球規模で考え、地域で行動せよ)」これは環境問題を考える上で非常に重要なフレーズとして世界的に有名な標語であるが、本章では横浜が抱える地域の課題や市民主体のまちづくりについて、SDGs 及び ESD の視点から整理していく。

1 横浜の現状と課題

(1) 横浜の都市づくりの変遷と現状

これまで横浜市は、宅地開発要綱による土地利用コントロール、横浜市六大事業による都心部再整備やニュータウンの開発及び高速道路や地下鉄の建設、魅力的な街並みの創造や歴史的建造物の保全活用等の都市デザイン活動により、横浜らしい個性と魅力を活かした都市基盤の整備を重点的に推進し、372 万人の人口を有する国際的な大都市としての骨格を整えてきた。このように、高度経済成長下の人口急増に伴う多くの都市問題を、時代に対応した戦略的な都市づくりによって乗り越えてきた本市ではあるが、少子高齢化、経済の停滞など、近年の社会経済情勢の変革に伴い、従来の都市づくりのあり方も見直しが必要となってきている。その一方で、地域においての市民ニーズが多様化するとともに増大してきており、これに対応するまちづくりの方策として、市民の力を活用する形での新しい地域まちづくりのあり方を模索する必要が出てきた。

(2) 超高齢・人口減少が進む横浜の課題

予測困難な未来を考える上で、最も信用度の高いデータが人口の推移である。高度経済成長以降人口が増大し 372 万人の大都市となった横浜市であるが、2019 年頃には人口減少局面に入るという予測が出ている。これはすなわち、成長、膨張を続けてきた横浜にとって、これまでとは全く異なる局面を迎えることを意味する。横浜市政策局によると、2025 年には高齢者が 100 万人に達し、そのうち 59 万人が

75歳以上の後期高齢者となる。また、少子化によって生産年齢人口は既に減少しており、30～40歳代の子育て働き盛り世代は2010年の116万人から2025年には91万人に減る見通しが出ている。(図7)

市内の生産人口が減少している背景には、共働き夫婦の増加に伴い、職住接近のニーズが高まったことによる東京への人口流出がある。また、女性の社会進出とともに晩婚化が進み、出産年齢の高い母親の割合が増えたことは、子育てと親の介護が同時進行する「ダブルケア」の状況を生み出している。さらに、成長・拡大期に形成された郊外の大規模住宅団地において急速に進行している人口減少は、空き家・空き店舗問題という形で表面化するだけでなく、若者の流出と高齢世帯の取り残しという状況を生み出し、その結果、居住空間の老朽化や近隣商店街の空洞化がさらなる人口減少を引き起こすという負のスパイラルに陥る地域も出始めている。

これらの問題は既に大きな社会問題となっており、こうした困難な状況に対して、これまでのように行政だけで課題に向き合うことが大変難しい時代になったと言える。



図7: 横浜市の人口構造をまとめたグラフ(横浜市政策局)

2 市民参画型まちづくりの推進

(1) まちづくりの定義

ここで、本研究におけるまちづくりの捉えを整理しておく。まちづくりという言葉が使われる場合、一般に新しい街を造るということではなく、既存のまちの課題を解決すべく、まちの魅力を高めたり、新たな価値を創造したりすることを指すことが多い。また、建物や道路、公園や街路樹の整備といったハード面だけでなく、地域の催しや人の交流の創出、まちのルールの作成などのソフト面の両方を指し、そのどちらも両輪として充実を図ることが大切であるとされている。都市開発や地方創生、地域の活性化等、使用する主体によって多様な意味を含む汎用性の高い言葉ではあるが、都市や地域社会の基盤がある程度確立し、新たな転換期を迎えていることを考慮すると、昨今のまちづくりの軸足はハードからソフトに移ってきたと言える。本研究では、このまちづくりのソフトの面、すなわち、まちの課題解決や新たな価値の創造に向けて、行政のみならず、企業やNPOや地域住民といった多様なステークホルダーが協働して取り組んでいる「市民まちづくり」に着目した。

(2) 多様なステークホルダーによる市民まちづくりの取組

ア 行政の取組 ～地域まちづくり支援制度の推進～

地域社会が成熟する中、自治会や町内会といった地縁型組織のみならず、地域課題の解決やまちの魅力づくりに向けて市民が自主的に活動するテーマ型組織が生まれ、市民によるまちづくりへの取組は活発さ、多様性を増している。横浜市ではこうした動きを受け、「地域まちづくり支援制度」を整えて市職員による出前塾を行ったり、まちづくりコーディネーターやまちづくり支援団体(NPO)といった専門家を派遣したり、活動経費や事業整備費の助成を行ったりするなど、市民参画型の地域まちづくり推進に積極的に取り組んできた。市民まちづくりは、利害の対立による紛争を回避したり、計画に正当性を与えたりするだけでなく、地域のコミュニティを活性化させ、行政の限界を補う住民自治を高める効果がある。また、地域の思いや願いを反映したまちの魅力づくりや課題解決が効果的に進むとともに、市民一人ひとりの市民意識を向上させ、自分たちが暮らす地域に一層の愛着心をもつことが期待されている。

こうした市民まちづくりを推進するには、公民の連携を高め、互いの信頼関係のもとで協働の関係を築きながら、企業、NPO、大学・研究機関、市民、行政など多様な主体がオープンな場で情報を共有して知恵を出し合い、その地域に合ったまちづくり活動を展開していくことが重要となる。

イ 企業による取組 ～横浜型地域貢献企業による取組～

横浜市は地元企業に対して、地域を意識した経営を行うとともに社会的活動等に取り組み、地域に貢献する企業を「横浜型地域貢献企業」や「プレミアム企業」として認定し、企業の持続的な成長及び発展を支援している。行政主導で企業のCSRを推進するこの動きは、横浜に根付いた中小企業や市民団体によって、市内各地で展開されている地域貢献活動を活性化させた。

企業による地域貢献には様々な取組があり、例えば株式会社大川印刷(戸塚区)は、エコ用紙の選定や環境に優しいノンVOCインキの使用、SDGsを前面に出した製品開発や広報活動で、社会や消費者に対する地球温暖化防止の意識向上を目指している。また、株式会社スリーハイ(都筑区)は、地域の子どもたちに製造業の良さを伝えたいという思いから工場の一部を「DEN」として地域に開放し、オープンファクトリーとして各種イベントを行っており、株式会社太陽住建(南区)は、地域を繋ぐ拠点とし

て自社の1階部分に「井土ヶ谷アーバンデザインセンター」を開設し、リビングラボ(図8)を開催する等、地域の交流や課題解決を行う場として地域社会に提供している。

上記3社をはじめ、横浜には、江戸時代に日本各地で活躍した近江商人の「三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)」に通じる社会貢献への理念をもった企業が数多く存在している。企業のCSRや地域貢献が活性化した背景には、「横浜型地域貢献企業」や「プレミアム企業」の認定といった行政の働きかけや、次項Ⅲ-2-(3)で示すNPOや中間支援組織の役割も大きく影響している。

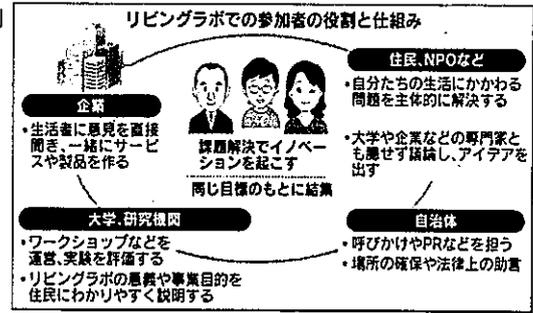


図8:リビングラボでの参加者の役割と仕組み

ウ まちづくりNPOによる取組 ～行政・企業・市民をつなげる～

次に、横浜で活動しているNPO法人の中で、特定非営利活動促進法が分類する20の特定非営利活動のうち、まちづくりの推進に取り組んでいるNPOについて整理する。

まちづくりNPOは、まちや地域にとって有用なことを行うNPOであるが、具体的には町並み保存、地域商店街の活性化、地域コミュニティの形成、まちづくり調査、地域情報誌発行の活動等に取り組むNPOがそれにあたる。例えば、横浜コミュニティデザイン・ラボは、地域の価値ある人・団体・プロジェクト等の地域資源の所在情報についてリサーチし、広く市民が地域資源の所在を知り、つながりをつくり、地域への参加のきっかけをつくる活動に取り組んでいる。また、在宅福祉活動のネットワークから生まれた中間支援NPOである市民セクターよこはまは、市民活動・地域活動の支援や協働ネットワークの推進、政策提言等、様々な事業に取り組んでおり、「市民活動支援センター」や「認知症サポーターキャラバン」、「よこはま地域づくり大学校」の運営も本NPOの事業の一つである。

このように横浜には、老朽化集合住宅の再生コンサルティングやマンション管理組合の運営サポート、地域イベントの開催による地域コミュニティの形成、商店街の活性化等、地域に根付いた様々な課題についてアプローチをしているまちづくりNPOや行政と地域の間につなげる様々な活動を支援する中間支援NPOが多数存在し、官民学の連携や市民参画型の地域まちづくりには欠かせない存在となっている。

Ⅳ 子ども参画型まちづくり

多様なステークホルダーによるまちづくりへの参画が進む中、近い将来に持続可能な地域社会の創り手となる子どもたちにも、社会参画の機会を与えようという取組が行われている。本章では、子どもの創造性を発揮できる社会の実現を目指すNPO法人ミニシティ・プラスの理念と同団体が主管している「特命子ども地域アクタープロジェクト」に着目し、社会的な意義だけでなく、教育的にも価値のある「子ども参画型まちづくり」について考察していく。

1 子どもの創造性を発揮できる社会の実現を目指して～NPO法人ミニシティ・プラス～

NPO法人ミニシティ・プラスは、2006年に横浜市職員有志、まちづくりNPO、まちづくり研究者らが立ち上げた「ミニヨコハマシティ研究会」を起源として2008年に発足し、「まちはそこに暮らす人、かかわる人たちで創り上げていく」という理念のもと、子どもや青少年が創造性や自主性を発揮できる社会の実現を目指して、現在「ミニヨコハマシティ」「ジュニア編集局(つづき・みなとみらい)」「特命子ども地域アクター」の3つの事業を行っている。次世代の地域まちづくりを担う人材を育成していくとともに、子どもがまちづくりに参画することにより、子どもから高齢者まで、誰もが暮らしやすい持続可能な地域まちづくりを推進することを目的としている。

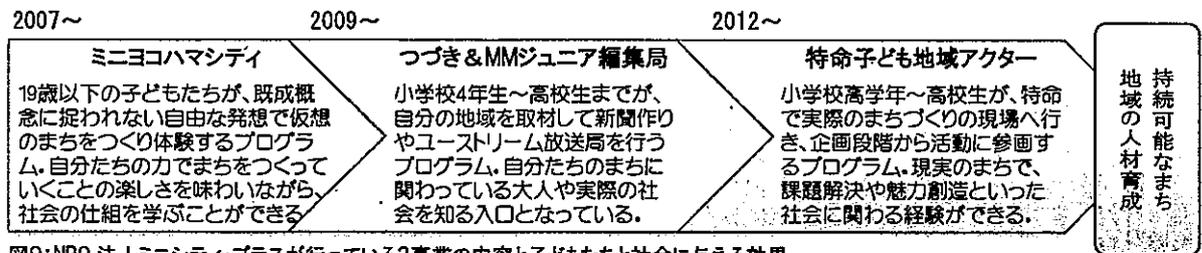


図9: NPO法人ミニシティ・プラスが行っている3事業の内容と子どもたちと社会に与える効果

それぞれの事業内容と活動の効果についてまとめたのが図9である。子どもたちの参加状況を見ると、このうちの一つに参加している子どももいれば、掛け持ちして複数参加している子どももあり、それぞれの経験を生かして豊かな活動を生み出している。このようにNPO法人ミニシティ・プラスの行っている3つの事業は、互いに関連しているだけでなく、ステップアップや相互作用的な効果が期待できる。

2 子ども参画型まちづくり「特命子ども地域アクタープロジェクト」

(1) プロジェクトの概要

ミニシティ・プラスが主管する3つの事業つに「特命子ども地域アクタープロジェクト」がある。まちづくりに積極的に関わろうとする県内各地の小学校高学年から高校生までの子どもたちを「特命子ども地域アクター」として養成し、県内各所のまちづくりの取組が行われている現場へと派遣するプログラムである。

本活動では、地域の活性化やイベントの企画運営に、子どもと大人が同じ立場で主体的、協働的に関わっていくことを基本としている。それにより、子どもの社会性を育むとともに子ども参画型まちづくりの推進を行っており、図10のように、地域と子どもの課題に対して、それらを解決する様々な効果を生み出している。この様な相互作用的な効果は本事業の最も重要な特徴であり、ミニシティ・プラスの理念でもある。(表6)

さらに、本活動の特筆すべき点は、派遣先の地元地域の子どもたちにも活動への参加を求めているところだ。すなわち、アクターが誘い水となり、活動を牽引するかたちで、子ども参画型まちづくりを派遣先の地域に根付かせることを目指しているのである。これはまさに、持続可能な地域社会の創造に繋がる、本活動の重要な要素であると考えられる。

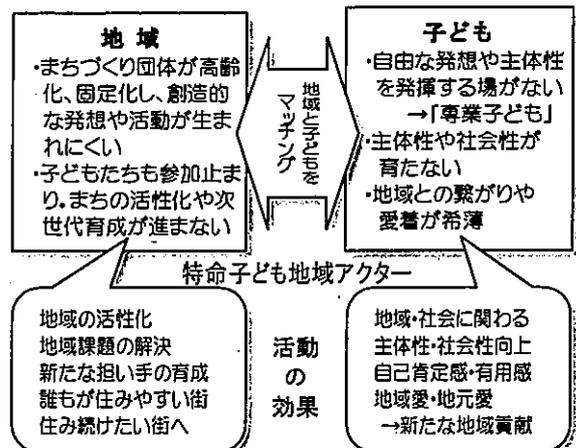


図10: 地域と子どもの課題と特命子ども地域アクターの効果

表6: 特命子ども地域アクターが子どもと地域にもたらす相互作用的な効果

<p>青少年の課題とまちづくり団体の課題をマッチング</p> <p>この事業には、私たちが解決したいと思っている2つのポイントがあります。</p> <p>まず1つは、今青少年の多くが、家や学校以外の場所、サードプレイスと呼ばれたりしている、そういう場所がなかなかなくて、青少年に社会性が足りないのではないかという話や議論があります。また、子どもたちは忙しかったり、少子化の中で友人関係が希薄になったり、あるいは同じ学校の友だちしか関係ができなかったりという課題があると思います。</p> <p>一方で、まちづくり団体についての課題は、私たちが関わっている地域、まちづくりの現場というところであれば、自治会町内会の活動や、あるいは今日お越しいただいているようなテーマを持って活動されている市民活動は、その内容によってかなり高齢化していたり、スタッフがいつも同じだったり、次世代につなげていくようなことができていないとか、あるいは活動自体が少しルーティン化してしまっている、マンネリ化している課題があると、いろいろなところで話を聞いております。</p>	<p>ミニシティ・プラス理事長 三輪 律江</p>
<p>マッチングから生み出される青少年の社会参画の機会</p> <p>この事業は、2つの課題をうまくつなげるということを出発点として始めております。簡単にいえば、ミッションを帯びた子どもたちが、まちづくりの現場に入ってもらう、インターンをするということです。そのことを通して社会の中に、子どもの地域社会参画を浸透させていくプログラムや、あるいはまちづくりをする方たちに青少年の可能性を知ってもらう、気づいてもらうような機会をつまく生み出していくというプログラムとして、始めました。</p>	
<p>＜子どもの創造性を発揮できる社会に！NPO 法人ミニシティ・プラスの10年【後編】より抜粋＞</p>	

(2) 活動の流れ

本事業の1年間の活動の流れは、図11の通りである。県内のまちづくり団体と子どもたちの募集及び決定を経て、子どもたちと事業主との「お見合い会」を行い、互いの希望をもとに派遣先を決定する。その後、横浜市立大学 国際総合科学部 国際都市学系まちづくりコースの協力を得て「まちづくりのいろは講座&ワークショップ」を開き、まちづくりの基礎を学んだ子どもたちを県内各所のまちづくり団体に派遣する。子どもたちは、まちづくり現場で企画段階から活動に加わり、その成果を3月の成果発表会で報告する。成果発表会では活動の報告だけでなく、アクターと派遣先のまちづくり団体の大人たち、さらに当日の参観者も加えてフリートークを行う。本音で活動をふり返り、本事業の意義や課題について意見交換を行う場となっており、次年度の活動をさらに豊かにするのに重要な役割を担っている。

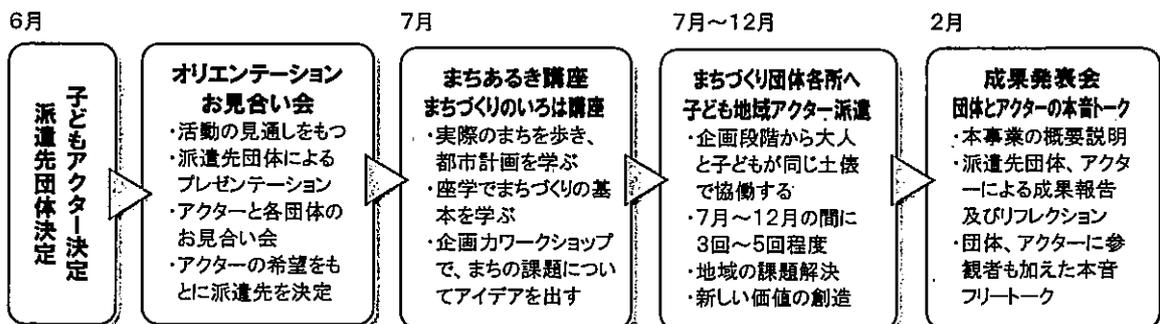


図11: 特命子ども地域アクター活動の流れ

(3) 2018 年度 派遣先まちづくり団体

2018 年度の特命子ども地域アクタープロジェクトの派遣先まちづくり団体は、次の 9 団体である。

表7:2018年度 特命子ども地域アクター 派遣先まちづくり団体一覧

	派遣先まちづくり団体	子ども地域アクターへの特命	分類
1	NPO法人横浜プランナーズネットワーク(2)	山北町での空き家の利活用に関して大人と一緒に取り組む。若者ならではの意見が欲しい。／足柄上郡山北町(JR 御殿場線、山北駅)	空き家活用
2	川崎市まちづくり局(2)	昨年度作成した「川崎景観ボードゲーム」のテストプレイをしてもらい、意見をもらうことで、より完成度を高めたい。／川崎市川崎区(JR 川崎駅)	ゲーム開発
3	特定非営利活動法人 Love つづき(2)	地元の野菜と小麦を使って、商品開発をしている。こどもたちの意見もつくりながらつくっていききたい。PR の仕方についても考えて欲しい。／横浜市都筑区(横浜市営地下鉄、中川駅)	商品開発
4	逗子市子育て支援課 青少年育成係(初)	小学生を対象とした体験学習にサポーターとして参加し、一緒に「スマイルまつり」の企画、運営を行ってほしい。／逗子市池子(京急逗子線神武寺駅)	イベント立ち上げ
5	「こどものまち」をかわさきで やってみよう実行委員会(初)	10 月にはじめて開く予定の武蔵小杉でのこどものまちの立ち上げと一緒にやってほしい。／横浜市港北区武蔵小杉(東急東横線、武蔵小杉駅)	イベント立ち上げ
6	千本桜商店会(2)	ふれあいサロンを中心に商店街で行う「千本桜こども文化祭」の企画と運営と一緒にやってほしい。／大和市福田(小田急線・高座渋谷駅)	イベント企画運営
7	サンロードあさひ商店会(初)	平塚市の旭地区で9月15日(土)にマルシェをやる。その盛り上げのお手伝いをさせていただきたい。／平塚市南河内(JR 平塚駅北口からバス)	イベント企画運営
8	大和商工会議所 桜ヶ丘支部(初)	9月16日(日)の商店街の通りを封鎖したイベントの子ども向けお手伝いをさせていただきたい。／大和市上和田(小田急江ノ島線桜ヶ丘駅)	イベント企画運営
9	戸部大通り商店街朝市(2)	商店街の魅力を知ってもらい、こども朝市をこどもたちの運営で実施したい。／横浜市西区(横浜市営地下鉄ブルーライン・高島町駅)	イベント企画運営

本事業は、子どもの地域社会参画の推進を目的とした取組として、神奈川県福祉こども未来局、子ども支援 NPO だけでなく、まちづくり NPO や企業で構成される「かながわ子どもの地域社会参画推進会議」により実施されている。(表 8) NPO 法人ミニシティ・プラスが主管となり運営にあたっているが、この協議会が「かながわボランティア活動推進基金 21 共同事業負担金対象事業」として実施することで、派遣先が横浜市内だけでなく県内各所に及んでいる。

アクターへの特命の内容をもとに分類すると、地域の活性化を目的としたイベントの立ち上げや企画・運営が全体の 3 分の 2 を占め、残りは子ども目線のアイデアを求めている団体である。

また、本年度初めてアクターの派遣を希望した団体もあれば、昨年度に引き続き 2 年目となる団体もある。3 年目を越える派遣先団体が登録されていないのは、本事業が持続可能性といったレガシーを派遣先の地域に残してきている成果と言える。(IV-3-(2))

表8:本事業の主催・協働・協力

主催	「かながわ子どもの地域社会参画推進会議」
◆	NPO 法人ミニシティ・プラス【事務局】
◆	神奈川県福祉こども未来局子ども未来部青少年課
◆	NPO 法人シャワーロックホームズ
◆	リスト株式会社
◆	NPO 法人横浜プランナーズネットワーク
◆	NPO 法人夢キューブ
◆	スマイルミニシティプロジェクト
協働	
◆	神奈川県福祉こども未来局子ども未来部青少年課
◆	産業労働局中小企業部商業流通課
◆	県土整備局都市部都市整備課
◆	神奈川県教育局指導部
協力	
◆	横浜市立大学国際総合科学部都市学系まちづくりコース

3 子ども参画型まちづくりの価値

(1) 子ども参画型まちづくりの教育的価値 (ESD の推進)

本研究では、子ども参画型まちづくりの教育的価値を ESD の視点から検証していく。しかしながら、II-3-(3)で示したように、ESD は、その概念が抽象的で多岐にわたる分野を包含するものであるため、何をもち ESD の推進と言えるのか、その尺度の選定が非常に重要であった。学校教育への転用、応用を考えたとき、やはりそれは子どもたちへの教育的効果、すなわち、まちづくりに参画したことによって「子どもたちにどんな力が育つのか」という視点で検証すべきであると考え、II-2-(3)で示した国立教育政策研究所の ESD 先行研究「学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究 [最終報告書]」の「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度 (例)」をもとに、子ども参画型まちづくりによって向上が期待される 7 つの能力・態度 (以後、「ESD で重視する能力・態度」) についての質問紙調査等を実施した。

ア 調査及び検証の方法

子ども参画型まちづくりの教育的価値についての調査及び検証は、アクター 23 名と市内公立小学校 8 校の 5、6 年生の児童 1319 名に質問紙調査を実施し、その結果を比較することで行った。「ESD で重視する能力・態度」について (①そう思う、②どちらかと言えばそう思う、③どちらかと言えばそう思わない、④そう思わない) の 4 件法での回答を求めるとともに (表 9)、アクターには活動への参加動機や目的、達成感等を回答する項目、公立小学校一般児童には総合的な学習の時間への取組状況や地域社会への貢献意識を回答する項目を追加した。なお、アクターへの調査は活動前と活動後と比較するために 6 月と 12 月の 2 回実施した。年間 38 回の活動に 5 回以上参加したアクターを調査対象とし、母集団 23 人の中で 2 回の質問紙調査を行えたのは 16 名である。研究における調査対象として十分な数量を満たしているとは言えないが、研究期間が限られている本研究では、この人数で検証していく。

表9:「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)」をもとに作成した14の質問文

質問内容	質問文
1 批判的に	あなたは、インターネットやテレビなどの情報や他の人の意見を、よく分からないまま信じたりせず、じっくり考えてから取り入れるようにしていますか。
2 考える力(批判)	あなたは、むずかしいことに取り組むとき、「これでいいや」とかんたんに答えを求めたりせず、自分から進んで良い方法を考えるようにしていますか。
3 未来像を予測して	あなたは、これから何か活動を始めるときに、活動のイメージや目的を考えるなど、あるていどの計画を立てて取り組むようにしていますか。
4 計画を立てる力(未来)	あなたは、自分のことだけでなく、いっしょに活動する仲間やその活動に関わる人たちのことを考えながら、計画を立てて取り組むようにしていますか。
5 多面的、総合的に	例えば、「学校」は、勉強するところの他に、地域の避難所、思い出の場所、先生の働くところ、盆踊り会場、まちの目印など、色々な見方ができます。このように、あなたは、ひとつのことに對して、様々な見方をすることを大切に考えていますか。
6 考える力(多面)	例えば、買い物をする時に、値段だけでなく、品質や量、必要感、優先順位など、ひとつのことだけでなく、様々なことを同時に考えて、全体として「買うか、買わないか」を決めることをしていますか。
7 コミュニケーションを	あなたは、話し合いのときに、異議・反対の意見だけでなく、その理由についても、自分の気持ちや考えをまとめて、分かりやすく伝えることができますか。
8 行う力(伝達)	あなたは、自分以外の様々な人の考えや意見を大切に、それらを選んで自分の中に取り入れようとしていますか。
9 他者と協力する	あなたは、集団で行動するとき、自分勝手にせず、まわりの人のことを考えながら、協力して行動していますか。
10 態度(協力)	あなたは、何か活動するとき、仲間と役割分担をしたり、チームで力を合わせたりすることを大切にしながら取り組んでいますか。
11 つながりやを尊重	あなたは、自分が、様々な人やもの、こと、社会、自然とのつながりの中で生きていることを考えたり、そのつながりを大切にしようとしていたりしていますか。
12 する態度(関連)	あなたは、自分が一人で生きていると思いにんだりせず、いろいろなもののおかげで自分が生きていると考えたり、それらに感謝したりすることがあります。
13 進んで参加する	あなたは、自分の言ったことやしたこと責任をもち、まきりや約束を守って、ものごとに取り組んでいますか。
14 態度(参加)	あなたは、自分から進んで他者のために行動したり、自分の意思で積極的に様々な活動に参加したりしていますか。

イ 検証の結果

(ア) 特命子ども地域アクターへの調査

母集団 23 人の中で、活動の前後 2 回の質問紙調査を実施できた 16 名の回答を点数化し(表 10)、検証を行ったところ、次の 5 つの検証結果を得ることができた。

- 「ESD で重視する能力・態度」の自己評価には個人差がある。
- 子ども参画型まちづくりの活動を通して、「ESD で重視する能力・態度」の自己評価の若干の向上が見られた。
- 《批判》《多面》《関連》《参加》の項目で上昇が見られたが、《未来》《協力》では減少、《伝達》は変化なしという結果であった。
- 「ESD で重視する能力・態度」の自己評価の向上と活動の満足度及び参加回数の相関は見られなかった。
- 「ESD で重視する能力・態度」の自己評価が高いアクターは、子ども参画型まちづくり活動への参加経験が豊富である。

まちづくりに関心の高いアクターと言っても、その実態は様々で、個性も、家庭環境も、これまでの経験も一人一人異なる。活動への参加動機も、自ら進んで活動に参加してくる子、教育への関心が高い保護者に勧められた子、友達に誘われて活動に加わった子、自分の居場所や新たな出会いを求めてくる子と多岐にわたり、それらを踏まえると、①は当然の結果と言える。活動前後での回答の変化を比較してみると、全体として 0.03 ポイント上昇があり、子ども参画型まちづくりが ESD に与える一定の教育的効果は見られたものの、大きな変容が認められるとまではいかなかった(②)。「ESD で重視する能力・態度」の項目別に見ると、《批判》《多面》《関連》《参加》の項目でポイントが上昇したが、《未来》《協力》では減少、《伝達》は変化なしという結果になった(③)。「ESD で重視する能力・態度」の自己評価が向上したのは、立場も年齢も異なる多様な人々の中で、様々な見方や考え方に触れ、協働しながら課題解決に励み、活動に達成感や満足感を得た結果であろう。また、《未来》《協力》の自己評価が低下したのは、どの活動も大枠は既に決まっておき、全体的な計画を立てる場面がなかったことや、役割分担や協力が当たり前の状況で、意識することも少なかったことが考えられる。活動前後の回答の変化には個人差があることから、

表 11: 子ども参画型まちづくり活動の効果に対するアクターの回答と関連する能力・態度

<p>(20) 活動を通して得たもの(活動してよかったこと)はどんなことですか。</p> <p>・いろいろ意見が出て、自分たちで企画することができて楽しかった。①②</p> <p>・様々な方の行動力や考え方に影響を受けた。①③④⑥ ・・発想力が付いた。②③</p> <p>・自分たちで企画して作り上げた活動をお客さんが楽しんでくれて、とても達成感がありました。今後は、お客さんを笑顔にできるボランティア活動をもっとしたいです。②⑥⑦</p> <p>・大人との付き合い方やつながり、それを長続きさせる難しさ。④</p> <p>・たくさんの人と協力し、活動した地域をよく知ることができた。⑥⑩</p> <p>・他の学校の人や異学年、大人の人と関われる、友達が増えた。⑥⑩</p> <p>・広い心、協力する心を、様々な年齢の人から学んだ。⑥⑩</p> <p>・裏方はおもしろい!!⑥⑩ ・・生きるための楽しさを知った。⑦</p> <p>・活動して良かった。もっと人の役に立ちたいと思いました。⑥⑩⑦</p> <p>・今後も誰かと関わっていくことを大切にしたいです。⑥</p> <p>・作業が楽しかった。ふれあう心などを学んだ。⑥</p> <p>・社会で役に立つような体験ができて良かった。⑦</p> <p>・チャレンジする大切さを知ることができた。⑦</p>	<p>①批判(+0.13)</p> <p>②未来(-0.20)</p> <p>③多面(+0.09)</p> <p>④伝達(変化なし)</p> <p>⑤協力(-0.10)</p> <p>⑥関連(+0.06)</p> <p>⑦参加(+0.15)</p>
--	--

表 10: アクターを対象とした調査結果の活動前後の比較

	活動前(6月)							活動後(12月)								
	批判	未来	多面	伝達	協力	関連	参加	平均	批判	未来	多面	伝達	協力	関連	参加	平均
A男	3	4	3.5	3.5	4	4	3.5	3.64	3.5	3	3.5	4	3.5	4	4	3.64
B男	3.5	4	3.5	3	4	3.5	3.5	3.57	4	4	4	3.5	4	4	4	3.93
C男	3	3.5	4	2.5	4	3.5	3	3.38	3.5	3	3	3	3.5	4	3	3.28
D男	3	3	2.5	2.5	3	2.5	2.5	2.71	3	3	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.38
E男	3.5	3	4	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3	3.5	3.5	3.5	3	3.5	3.5	3.38
F男	2	3	3	2.5	3.5	4	2.5	2.93	2	3	3	2	3.5	3.5	3	2.86
G男	4	4	4	4	4	4	4	4	3.5	4	4	4	4	4	4	3.93
H男	3	3	3	2.5	3	3.5	3	3	2.5	3	3.5	2.5	3.5	3	3	3
I男	2	2.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.14	2	2.5	3.5	4	3	3.5	2.5	3
J男	3.5	3.5	4	4	4	4	4	3.79	3	3	3	1.5	3	3.5	3.5	2.93
K男	3	2.5	3	2.5	3	3	3	2.86	2.5	2.5	3	2.5	3	2.5	3	2.71
L男	2.5	3.5	3	3.5	3.5	3.5	3	3.21	3	3	3.5	3	3	3	3	3.07
M男	2.5	2.5	2.5	3	2	2	2	2.38	3	2	3.5	3.5	2.5	3	2	2.79
N男	3	4	4	4	4	4	4	3.5	3.79	4	4	3.5	4	4	4	3.5
O男	4	3.5	3.5	3.5	3	4	3	3.5	4	3.5	4	3.5	3.5	4	3.5	3.71
P男	3	4	3.5	4	3.5	3.5	3.5	3.57	4	4	4	4	4	4	4	4
	3.03	3.34	3.41	3.25	3.47	3.5	3.16	3.31	3.16	3.19	3.5	3.25	3.41	3.56	3.31	3.24

※回答結果の点数化…アクターの回答を次のように点数化して検証を行った。2.5 以上でポジティブ回答となる。(①)そう思う:4点、(②)どちらかと言えばそう思う:3点、(③)どちらかと言えばそう思わない:2点、(④)そう思わない:1点

個人レベルでの回答の変化は、そのアクター自身の活動への満足度及び参加回数との相関があるのではないかと考えたが、回答を比較した結果、その相関は認められなかった(④)。さらに⑤は、「特命子ども地域アクター」の経験年数及び、NPO 法人ミニシティ・プラスが行っている他の 2 つの事業(「ミニヨコハマシティ」「ジュニア編集局」)への参加経験との比較から明らかになった結果である。まちづくりへの参画経験と「ESD で重視する能力・態度」の自己評価の高さは比例しており、このことから、子ども参画型まちづくりが ESD で重視する能力・態度の育成に果たす役割が大きいと考える。

ウ 検証結果の考察

(ア) 子ども参画型まちづくりは ESD の推進に効果的である

検証の結果、子ども参画型まちづくりは、「ESD で重視する能力・態度」の育成に効果があることが見えてきた。まちづくり活動の中には、多様な人々と対話を繰り返しながら協働的に課題解決に励んだり、様々な側面から物事を捉えながら新しいアイデアや価値を創造したりする活動が含まれており、子どもたちは、地域社会に参画することを通して次代を生き抜く力を養っているのである。また、空き家活用や商店街の活性化、障害者自立支援施設と協働で取り組む地産地消の推進等、その活動自体が SDGs に紐づくものが多く、これらのコンテンツから持続可能な社会の創造に対する理解の深化も期待できる。

ESD とこれからの学校教育が目指す先が同じベクトル上にあることは、II-2-(3)で示した通りである。すなわち、子どもたちを地域社会のまちづくり活動に参画させていくことは、ESD の推進のみならず、これからの学校教育を充実させるためにも、大変重要な意味をもつと言える。

(イ) 子ども参画型まちづくりは子どもの生き方に影響を与える

図 16 は、「特命子ども地域アクター」と「つづきジュニア編集局」という 2 つの子ども参画型まちづくり事業に参加していた当時高校 1 年生の A さんが書いた記者コラムである。この中で A さんは、「記者になってからの学び、成長したことは数えきれないほどあります。記者でなかったら、私はどうなっていたのでしょうか。考えたくもありません。」と活動を振り返っており、ここで得た学びの一部を紹介しながら、本活動の価値について述べている。このコラムからも、また A さんがこの時の経験を生かし、現在、大手新聞社の記者として自分の夢を実現させたことから、子ども参画型まちづくりが果たす教育的な役割は大きい。子ども参画型まちづくりは、子どもたちのその後の生き方にも影響を与えている。

図 16: 特命子ども地域アクター及び都筑ジュニア編集局 OB による「つづきジュニア記者コラム」



(2) 子ども参画型まちづくりの社会的価値 (持続可能な地域社会の創造)

アクターの派遣先であるまちづくり団体に聞き取り調査を実施し、子ども参画型まちづくりの社会的価値について検証と考察を行った。まず、子どもが地域社会のまちづくりに参画することの良さを複数挙げてもらい、それについていくつか質問をしながら詳細を伺うかたちで調査し、その内容を検証することで、次の 4 つの価値が見えてきた。

- ① 子どもの自由で柔軟な発想により、地域の課題解決や新しい価値創造が進む
- ② 親世代や高齢者世代までもがまちの催し等に参加するようになり、まちが活性化する
- ③ 子どもたちの中に地元愛や地域愛が生まれ、未来のまちの担い手が育つ
- ④ 大人の間にも協調や協働の意識が生まれる

表 17: まちづくり団体への聞き取り調査(子ども参画型まちづくりの社会的価値について)

<p>子どもと仲良くすれば親が書いてくる。「今度、あそこの八百屋さんで買ってみようか」ってことになってくる。将来的に子どもさんがここに来た住めば「昔のこともあるからこの商店で買ってこよう」ともあ、それは昔が順繰りやってることで、商店街ってそういうもんじゃ。近所の人が買いに来て、それで成り立ってる。</p> <p>子どもたちが大道芸やよさこい、トランペットを吹いてくれるんで、地域の大人は大喜びですよ。それに、大勢人がいるから子どもたちの発表の場にもなるし、地元での思い出になる。参加した子どもは、絶対「こんには、」って挨拶するようになる。そういう子は中学へ行っても挨拶するよ。1回顔馴染みになれれば、商店街がやっているお祭なんかにも「僕たち手伝いますよ。」って、来るようになりました。</p> <p>商店会の大人の反応も良い。お金からないし、「子どもたちとの繋がりができて良かった」って書いてるよ。あと、子どもが入れば、大人も「ああでもない、こうでもない」って言うのを控えるしさ。子どもから教わることも結構ある。子どもって、大人が考えるより分かってるんだよね。そこを大人が心配になって声をかけるよりも、やらせちゃった方がいい。まあ、任せて、やってあげたら、大人が「すみません、ちょっと申し訳ない、あまりうまくいなくて、」って方が多いでしょ。だから、あんまり成功させようって思わない方がいい。其々の立場で大人が口出して子どもが絡こまっちゃうても困るし、子どもは大人が思いつかない方法でやるかもしれないでしょ。子どもは子どものなりに結構考えているんだよ。</p> <p>商店街の活性化は、まだこれからじゃないかな。子どもたちが朝や日曜日の経験をつめば、「今度自分たちでこういう催しを、新たなものをやってみようかな」というふうになるでしょ。その時には協力していきたいね。まあでもやってみて、みんな楽しんでくれたら、それでひとつ良いしなかな。それからまた次々始まっていくだろうから、今はまだ商店街としては種を蒔いている状態で、まだまだ芽が出るまではいいかな。どうせ、お客さん来てくれていたってそうはいかないんだから、やっぱりじっくりといかないかな。「商店街がこんな活動をしているんだ」っていうことを若い人たちに知ってもらいたくないかな。</p> <p style="text-align: right;"><2019.1.23. 戸部大通商店会会長の聞き取り調査より></p>

効果のある程度予想して調査したものの、意外だったのは④であった。子どもがまちづくりに参画することで、大人たちの中にも協調や協働の意識が芽生えるのである。「子どもが折角考えたのだから皆で実現しよう」「子どもの前でみっともない真似はできない」そんな声があちらこちらで聞かれるようになった。子どもがまちづくりに参画することで、大人たちのパフォーマンスも向上する。これは、重要な効果の一つである。このように、子ども参画型まちづくりに、社会的にも十分な価値があることが認められた。子どもの社会参画は、持続可能な地域社会の創造のために、なくてはならないものである。

(3) ミニシティ・プラス関係者が考える子ども参画型まちづくりの価値

表 18 は、NPO 法人ミニシティ・プラスの子ども参画型まちづくり事業の受益者（現役、卒業生）や運営スタッフ 17 名に実施した活動成果に関するワークショップの記録シートをまとめたものである。ここでも、「失敗という概念がなくなる」「第三の場の獲得」「参加した時から社会人 1 年目」「多様性に寛容な社会の形成」「ジブンゴトビト」「地域への Gateway」等、活動に深く関わった人間ならではの表現で、子ども参画型まちづくりの価値を振り返っている。

表 18:アクター経験者及び運営スタッフが考えるミニシティ・プラスの活動成果

子どもにとっての成果(教育的価値)	社会にとっての成果(社会的価値)
<ul style="list-style-type: none"> ・やりたいことが見つかる(主体性)→試せる(行動力) ・失敗という概念がなくなる・自分に自信がつく ・社会人として扱われる経験→自己肯定感 ・積極性、企画力、考える力、つながり力が身に付く ・世代や年齢をこえた関係づくりができる ・(家庭や学校以外の)第三の場(サードプレイス)の獲得 ・まちへの興味・視野の広がり・人見知りの克服 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会人育成(楽しさを見出せる大人、人任せにしない大人、主体性と行動力のある大人)・他者への気付き ・地域の大人にとっては、子どもと接する機会になる ・まちに新しい価値や変化が生まれる・地域愛を育む ・地域社会の活性化・大人が子どもへの尊敬する ・つながりがある社会・多様性に寛容な社会の形成 ・オモシロイが増えて、まちの魅力も増える
キ	・参加した時から社会人 1 年目・自分から動かないと楽しくない・自分事人(ジブンゴトビト)・新しい自分
ワード	・前向き大人・受容できる大人・地域への Gateway・まちと、大人と、子どもと出会う、出会いの場

4 ESD の推進がまちづくりに与える影響

子ども参画型まちづくりが教育的にも社会的にも様々な価値があることは証明されたが、ESD の推進と持続可能な地域社会の創造との関係性はどうか。ESD 研究の第一人者で「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議代表理事の阿部治は、ESD の視点を用いた新たな地域づくりの事例を複数挙げ、「ESD が持続可能な地域づくりに果たしていく役割は、将来にわたって極めて大きい」（阿部 2009）としている。すなわち、子ども参画型まちづくりが ESD の推進や持続可能な地域社会の創造に効果がある一方、ESD の推進がまちづくりに与える影響も多分にあり、両者は密接な関係にあるということである。

Ⅲ-1-(2)でも示したように、横浜が抱える課題はこれまでとは全く異なる局面を迎え、新しい地域まちづくりのかたち求められる。これは本市だけに当てはまることではない。地域社会全体が大きな転換期を迎えている今日、双方向的にプラスの影響を与え合う ESD の推進と子どもたちを含めた市民参画型まちづくりは、どちらか一方ではなく、相乗的な効果を生み出しながら、協働、互惠、もちつもたれつ関係を築きつつ、同時に進めていくことが重要であると考えられる。

V 学校教育における子ども参画型まちづくりの実現を目指して

学校教育において子どもたちの地域社会参画を推進していくには、何が必要で何が課題となっているのか。本章では、「1 地域人材を活用した総合的な学習の時間の充実」「2 学校と地域を繋ぐコーディネーターの役割」「3 教師の資質・能力の向上を促す『学校における働き方改革』」の 3 つの視点から、その重要性和課題を提示しつつ、学校教育の中で子ども参画型まちづくり活動を充実させていくために必要な具体的な方策について探っていく。

1 地域人材を活用した総合的な学習の時間の充実

これまで、防災訓練や見守り隊、読み聞かせや学習サポーター等、地域との関わりの中で行われている教育活動はいくつも実践されてきた。しかし、子どもたちが主体となって地域社会と繋がることのできる場は、地域社会をフィールドに展開される総合的な学習の時間の活動の中にこそある。本研究の調査(Ⅳ-3-1-ア)でも、総合的な学習の時間の充実度が高い児童ほど、地域社会への参画意識も高いという結果が出ており、地域人材を生かしながら総合的な学習の時間における子どもの地域参画及び社会参画の充実を図ることが、「まちづくりと共に歩むこれからの学校教育」を実現させるために重要である。

しかしながら、総合的な学習の時間や地域との連携については、学校間及び学級間でその取組に差があることは否めない(Ⅳ-3-1-イ)。先行研究の中で桐山(2018)は、総合的な学習の時間で地域の人材を活用する際の課題として、「打ち合わせ・調整の難しさ」「活動の継続を求められる難しさ」「謝金やお礼を返せないことの難しさ」の 3 点を挙げている。さらに、過去 2 年間地域人材を活用していない教員に対して行ったその理由を問う質問の回答として、「地域人材を活用する機会がなかった(32.4%)」「学習が地域人材を活用する展開にならなかった(28.4%)」に続き、「他の仕事が多く、地域人材を活用する準備の時間がなかった(27.0%)」「地域人材とのつながり方が分からなかった(21.6%)」を挙げ、学校現場における地域人材の活用の難しさを提示している。桐山(2018)は、自ら考案した「学びに適した地域の人材を見つけるフロー」において、地域人材と繋がる手立てとして、「児童の関係者を探す」、「校内の職員への情報発信・相談」の次に、「学校・地域コーディネーターの活用」を挙げている。

2 学校と地域を繋ぐコーディネーターの役割

(1) NPO 法人ミニシティ・プラスの実践から

多様なステークホルダーが協働する際に、コーディネーターの役割が重要となることは、これまでも繰り返し述べてきた。本研究の児童質問紙調査でも、「ESD で重視する能力・態度」に対する自己評価が高い上位校は、学校長と中間支援 NPO、任意の学校地域コーディネーター、「はまっ子未来カンパニープロジェクト」といった学校と地域社会を繋ぐコーディネーターが効果的に機能している学校である。

コーディネーターが重要であるのは、「特命子ども地域アクター」でも例外ではない。NPO が、子どもたちと地域を繋ぐ仲介役となっていたからこそ、子ども参画型まちづくりが成り立っていたと言っても過言ではない。表 19 は、NPO 法人ミニシティ・プラスが子ども参画型まちづくり事業を進めるにあたり行ってきたコーディネーターとしての役割である。⑥を除いては、学校現場においても総合的な学習の時間等で、担任教師が行ってきたことであるが、児童指導や教材研究及び日々の業務に追われながら、担任教師がコーディネーターとしての役割を果たしていくのは、決して容易なことではない。

近年、地域との連携協力によって学校教育を充実させようという動きが広まっており、2016 年 1 月 25 日に文部科学省から公表された「『次世代の学校・地域』創生プラン～学校と地域の一体改革による地域創生～」でも、その具体的施策として、地域と学校の連携・協働に向けた改革（コミュニティ・スクール、地域学校協働活動の推進）に取りかかった。これを受けて横浜市でも、地域住民の参画による学校支援活動を推進するため、地域と学校との調整役を担う「学校・地域コーディネーター」の養成講座を中心に「学校・地域連携推進事業」を実施している。本研究の主題である「まちづくりと共に歩むこれからの学校教育」を実現するために、また総合的な学習的な学習の時間を充実させ、子どもたちを地域社会に参画させるために、学校と地域を繋ぐコーディネーターが主体性を発揮し、関係するステークホルダーと連携しながら効果的に機能していくことは、非常に重要であると考えられる。

表 19: NPO 法人ミニシティ・プラスのコーディネーターとしての役割

- | |
|----------------------------|
| ① 子どもたちとまちづくり団体をマッチングする |
| ② まちづくり団体へ活動目的や留意事項の理解を求める |
| ③ 日程の連絡及び調整を行う |
| ④ 活動に必要な道具や備品等の準備をする |
| ⑤ 必要に応じて助言や情報提供を行う |
| ⑥ 地域の子どもを巻き込む手法を団体に提案する |

(2) 「特命子ども地域アクタープロジェクト」に学級単位で参加した H 小学校 6 年 1 組の実践から

総合的な学習の時間の活動として「特命子ども地域アクタープロジェクト」に学級単位で参加した H 小学校 6 年 1 組の取組においても、豊かな活動を支えていたのは複数のコーディネーターの存在であった。本学級の総合的な学習の時間の活動記録と担任教師のリフレクションを表 20、表 21 にまとめた。

表 20: 「61 が世界に答える～小麦プロジェクト」主な活動記録

日付	主な活動
5月	アクターである D 児の提案で、クラスの総合的な学習の時間の取組を、「特命子ども地域アクター」とコラボレーションして行うことが決まる。
6.17	オリエンテーション&お見合い会、まちづくり講座には、D 児が代表として参加し、「I love つづき」と協働で地元の野菜と小麦を使った商品開発及び PR 活動「都筑産小麦商品化プロジェクト」を行っていくことが決まる。
7.1	
8.25	都筑区で小麦を栽培している「都筑ハーベストの会」の畑で、施設の方と一緒に野菜の収穫体験を行う。
9.11	「I love つづき」「都筑ハーベストの会」の方を招き、合同キックオフ&顔合わせ。子どもたちと活動の見通しを共有する。
11.15	「I love つづき」の方を招いてレシピ開発を行う。
11.27	都筑ハーベストの会の方を招いて交流会。D 児が代表で「I love つづき」でレシピ検討会に参加し、クラスのレシピ案を提案する。
12.3	保護者の方を巻き込んだパン作り教室
1.16	都筑産小麦を使ったクッキーのレシピをもとに「菓子工房スグーリ」が試作したクッキーを子どもたちは試食し、商品名とパッケージデザインを考案。
1.25	「スグーリ」の F さんと「I Love つづき」の C さんが来校。F さんの生き方に迫る「応え合いインタビュー」を実施。
2.9	畑での麦踏みイベントに数名の児童と担任が代表として参加。
2.15	センター南駅前にて、小麦クッキー販売&ダンスパフォーマンス(予定)
3.1	卒業を祝う会で、学びの成果の発信と感謝の思いを伝える。(予定)

表 21: 「61 が世界に答える～小麦プロジェクト」担任教諭によるリフレクション

「応える」「応え合う」というテーマは、「世界の様々な 課題に気づき、考え、行動することを目指すものである。(中略)自分たちが得意とする「パフォーマンス」を生かし、世の中に貢献することの喜び、自分たちの力で作ることができる喜びをベースに、子どもたちは活動を進めてきている。多くの「世界の人」や「世界のもの・こと」と出会ってきたのが担任の仕事である。結果的に子どもたちは、「世の中には多くの課題が存在しているんだ」、「自分たちも力になる『道』があるんだ」という思いを持つに至る経験をしたと考えている。また、活動の副産物として、都筑区、横浜市という「ふるさと～ひと・もの・こと」に対する「愛」が生まれた。上述の「世界の人」の中に、NPO 法人「I love つづき」の B さん、C さん、保護者の D さん、そして横浜市大研究生で、横浜市の教職員でもある E さんは、それぞれの立場を生かしながら、活動の目指すものに賛同し、興味をもって支援していただいた。この 4 人が組織立っていない『チーム』としてコーディネーターになっているのは奇跡的である。4 人が「応える」人であったからできたことであり、このことから「応える」「応え合う」ことが、どれだけ重要なことかが分かる。学校だけではできない、いや、学校だけでは価値が作れない、学校だけでは「おもしろくない」。子どもたちが未来において「世界」をステージに生きていくことを考えれば、「世界」に子どもたちを誘うコーディネーターを地域や学校で発掘、育成していくことは必須であり、そして、そんな大人たちの姿を子どもたちに見せることが「種まき」になると信じている。

H 小学校 6 年 1 組は、NPO 法人 I love つづきと協働で、地元の野菜と小麦を使った商品開発及び PR 活動「都筑産小麦商品化プロジェクト」に取り組んだ。この活動の主なコーディネーターは、I love つづきの B さん、C さんに加え、本学級に在籍するアクターの保護者である D さんであるが、学校と地域の両方に精通した外部人材が仲介役を行い、両者の思いを繋ぎ、日程等の調整や活動の提案を行った役割は大きい。担任教諭は本活動のリフレクションの中で、この活動に関わった外部人材が、「組織立っていない『チーム』としてコーディネーターになっているのは奇跡的である。」と振り返っており、「4 人が『応える』人であったからできたこと」として、外部人材同士の連携の重要性を述べている。

このように、学校教育の中で子ども参画型まちづくりを高い水準で実現させるには、学校と地域をつなぐコーディネーターの自立的活動及び外部人材同士の連携が欠かせない。横浜市東山田中学校コミュ

ニティハウス館長（平成17年～28年）を務め、多彩な担い手が参画する学校と地域の新しい関係づくりを進めている竹原和泉氏は、学校・地域コーディネーターの更なる充実のために必要なこととして、広域的な地域コーディネーターのネットワークを構築し、学校・地域・企業・大学・行政等さまざまな組織のコーディネーター担当者をつなぐことの重要性を挙げている。コーディネーターが自立的・主体的に活動できるだけでなく、プラットフォームを形成しながら互いに連携していくことが重要なのである。

学校と地域を繋ぐコーディネーターの充実とその積極的活用により、学校と地域が連携・協働しながら、地域全体で子どもの成長を支え、地域を創生する活動を進めていかなければならない。

3 世の中との繋がりを生み出す「学校における働き方改革」

学校と地域社会の繋がりを生み出し、本研究主題である「まちづくりと共に歩むこれからの学校教育」の実現を目指すという視点から、最後に「学校における働き方改革」の必要性について考えていきたい。言うまでもなく、これは単に教師の勤務時間削減や負担軽減を行えば良いということではない。積極的に社会と繋がり、自らの人生を楽しみながら教師としての資質・能力を向上させていく、教師の働き方に対する意識改革、生き方改革の必要性についての問題提起である。

文部科学省中央教育審議会の学校における働き方改革特別部会は、2019年1月25日の答申において、「学校における働き方改革」の目的について表22のような見解を示している。

注目すべきは、学校における働き方改革の目的を「教師の人間性や創造性を高め、子どもたちに対して効果的な教育活動を行えるようにすること」と、明確に述べていることである。言い換えれば、学校における働き方改革の目的は、長時間勤務の是正や業務改善というよりもむしろ教師の資質能力の向上であり、学校における働き方改革を達成することが、子どもたちに対して効果的な教育活動を行うことに繋がるということである。V-1で示した桐山（2018）の先行研究においても、教師が地域人材を活用できない理由として「他の仕事が多く、地域人材を活用する準備の時間がなかった（27.0%）」「地域人材とのつなぎ方が分からなかった（21.6%）」が挙げられており、教師が、地域社会へ出て教材開発を行うことだけでなく、地域社会に対するアンテナを高く伸ばすことさえ難しい現状が見取れる。

本市の公立小学校にて、ユネスコスクールESD大賞の受賞経験のある住田（2019）は、自身の著書の中で「先生たちが主体的で、やりたいことをもち、それを実現させるためのゆとりを持つことは、これからの教育活動を推進するために欠かせません。働き方改革はそのためにもやらなければならないのです。」と記し、教師の意識改革とそれを支える「学校における働き方改革」の重要性を訴えている。

「学校における働き方改革」とは即ち、教師の意識改革であり、生き方改革である。教師は、自らの人生を豊かにすることで、これまで以上に社会と繋がり、自身の人間性や創造性を高めて教師としての資質・能力の向上を図ることが望まれているのである。

表22:新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について(答申)

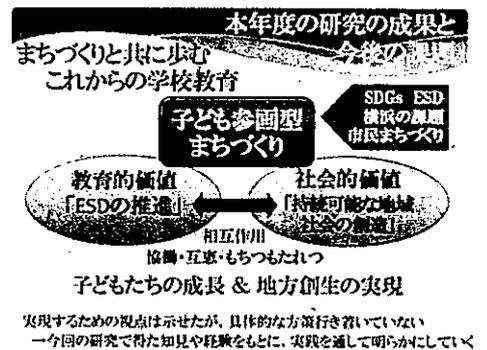
子供のためであればどんな長時間勤務も良しとする'という働き方は、教師という職の崇高な使命感から生まれるものであるが、その中で教師が疲弊していくのであれば、それは'子供のため'にはならない。教師のこれまでの働き方を見直し、教師が我が国の学校教育の蓄積と向かい合って自らの授業を磨くとともに日々の生活の質や教職人生を豊かにすることで、自らの人間性や創造性を高め、子供たちに対して効果的な教育活動を行うことができるようになることが学校における働き方改革の目的であり、そのことを常に原点としながら改革を進めていく必要がある。
<平成31年1月25日 中央教育審議会>

VI 本研究の成果と課題及び本年度のリフレクション

1 研究の成果と今後の課題

本研究を通して、横浜の現状や課題、市民まちづくりの成り立ちや仕組、それに関わるまちづくりNPOの取組や市民活動について持続可能な社会の創造といった視点で整理し、それをもとに、子ども参画型まちづくりの教育的価値及び社会的価値を明らかにすることができた。子ども参画型まちづくりは、学校教育におけるESDの推進（「ESDで重視する能力・態度」の育成）に効果があり、「批判的に考える力」や「つながりを尊重する態度」等、次代を生きる子どもたちに必要な資質・能力を養うことができるだけでなく、その後の生き方や人生観に影響を与えることが分かった。また、子ども参画型まちづくりは、持続可能な地域社会の創造においても大きな役割を担っており、未来のまちの創り手を育てることはもちろん、子どもの自由で柔軟な発想によってまちの課題解決や価値創造を促進させ、多くの大人を巻き込み、さらにその場にいる大人たちのパフォーマンスを向上させるという様々な効果をもたらすことも確認できた。さらに、ESDの推進と持続可能な地域社会の創造は、相互作用的に密接な関係にあり、子ども参画型まちづくりを行うことで、双方向的な価値を生み出すことができた。本研究主題にある「まちづくりと共に歩むこれからの学校教育」とは、学校と地域が協働、互惠、もちつたれつ（相互依存）の関係を築きながら、共に持続可能な社会の創り手となる子どもたちの成長を支え、同時に地域創生を実現していく、そんな「我がまちの学校」の姿であり、全ての地域や学校が目指すべきものであるという結論に達した。

図17:本年度の研究の成果と今後の課題



これらの研究結果を踏まえ、「まちづくりと共に歩むこれからの学校教育」を実現するために、「地域人材を活用した総合的な学習の時間の充実」や「学校・地域コーディネーターの役割」、さらに「教師の資質・能力の向上を促す『学校における働き方改革』」の必要性を示し、問題提起をすることはできたものの、本研究において、その具体的な方策まで明らかにすることはできなかった。これらの具体的な方策については、今回の研究で得た知見や経験を教育現場にもちかえり、それらと照らし合わせながら、実践を通して「まちづくりと共に歩むこれからの学校教育」のグッドプラクティスを明らかにしていきたい。

2 横浜市立大学派遣研修を終えて

学校の外側に身を置き、社会を取り巻く状況やその背景にある時代の流れを体験的に学ぶとともに、それらと関連付けながら学校教育を捉え直すことができたのは、今回の研修の最も大きな収穫であった。教育基本法（5条2項）には、普通教育の目的として「義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。」と記されている。学校は言わば、子どもたちが社会に出るための力を養い、市民となるための準備をする場である。その教壇に立つ教師が、社会の仕組や常識、解決すべき課題や世の中の流れに対して、深い理解と高いアンテナをもつことは必要不可欠であり、時代の変革期である今日、その重要度はさらに増してきていると感じている。

社会は常に変化の中にあり、時代は大きな変革期に差し掛かっている。しかし、学校現場ではそれを体感することが難しく、社会との間に見えない壁があるようにも感じる。アンテナを高く伸ばせない状況、社会との接点が極端に少ない状況、繋がりをもつことに積極的になれない状況等、学校現場が抱える様々な課題が見えてきた。地域社会では様々な場所で、協働、互惠、もちつもたれつ、の関係を築きながらオープンイノベーションが生まれている。そしてその社会に飛び立つのは、我々の目の前にいる子どもたちである。次代を生きる子どもたちのために、学校だけが取り残されるわけにはいかない。松下幸之助の「現状維持は後退の始まり」やWalt Disneyの「現状維持では後退するばかり」という言葉が示すように、「変容」なしに持続可能性の達成は在り得ない。これは企業や地域社会だけでなく、学校教育や教師においても同様である。既成概念や前例に囚われるのではなく、既存の取組を生かしながら新しい価値を生み出すオープンマインドな姿勢を、全ての学校、全ての地域、全ての人がもつ必要がある。

「持続可能な地域社会は、持続可能な学校から生まれる」と、住田（2019）は著書の中で記している。子どもたちが予測不可能な未来社会を自立的に生き、社会の形成に参画するのに必要な資質・能力を育成するために、学校教育の改善と教師の意識改革が早急に求められている最中に、教室と職員室がかけ離れてはいけいない。いつの時代も子どもは大人の、教師の背中を見て育つのである。今回の研修を通して、「横浜教育ビジョン2030」にある「自ら学び 社会とつながり ともに未来を創る人」の育成を実現するためには、子どもたちだけでなく、教師をはじめとする教育に関わる全ての大人が、「自ら学び 社会とつながり ともに未来を創る人」を目指す必要があると強く感じた。

最後に、本研究の主研究指導教員である横浜市立大学の三輪律江准教授の言葉を紹介する。

「子どもにやさしいまち、誰にでもやさしいまち」私ははじめこの言葉を、まちの機能面についてのユニバーサルデザインの視点を表している言葉だと捉えていた。しかしその本質は、むしろダイバーシティ（多様性の尊重）であり、子どもであることの「違い」を尊重し、「違い」に価値を見つけ、「違い」を生かしていくことであることに気が付いた。そこに関わる全ての人々が各々の良さを生かし、誰でも参画できる社会を築いていくことが、持続可能な社会、すなわち「誰にでもやさしいまち」を実現していくために最も大切なことである。本年度の貴重な経験とこの言葉を胸に、今後の人生において、自分自身が多様性を尊重し、オープンマインドな心と姿勢をもつ人間であり続けたいと強く思う。

引用・参考文献

- ・日本ユネスコ国内委員会「平成29年度版・ESD活動支援センター・リーフレット」
- ・ユネスコスクール「持続可能な開発のための教育(ESD)に関するグローバル・アクション・プログラム」
- ・阿部治 2009「持続可能な開発のための教育」(ESD)の現状と課題
- ・国際連合広報センター「我々の世界を変革する:持続可能な開発のための2030アジェンダ」
- ・首相官邸 HP「SDGsアクションプラン 2018」<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sdgs/dai4/siryout1.pdf>(最終閲覧:2018年9月23日)
- ・外務省交際協力局「持続可能な開発のための2030アジェンダと日本の取組」
- ・横浜市都市整備局「横浜市における地域まちづくりの推進に関する制度のあり方について(提言)」(2004)
- ・ミニシティ・プラス公式サイト minicity-plus.jp(最終閲覧:2018年10月25日)
- ・森ノト公式サイト「子どもはまちづくりの大切な仲間! NPO法人ミニシティ・プラスの10年」marinooto.jp/2018/10/09/miniyokoplus/(最終閲覧:2018年10月28日)
- ・文部科学省「地域学校協働活動 地域と学校でつくる学びの未来」及び「コミュニティ・スクール 2018～地域とともにある学校づくりを目指して～」
- ・横浜市教育委員会事務局 学校支援・地域連携課「学校・地域コーディネーター マニュアル<平成30年度版>」
- ・文部科学省「次世代の学校・地域」創生プラン(馳プラン)
- ・住田昌治(2019)「カラフルな学校づくり～ESD実践と校長マインド～」
- ・文部科学省中央教育審議会「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について(答申)」
- ・横浜市教育委員会「横浜教育ビジョン2030」及び「第3期横浜市教育振興基本計画(2018年度～2022年度)」

みなとみらい21エリアは、横浜市の六大事業として整備されてきた、横浜市の中でも新しいまちです。商業施設やオフィスなどを中心に、計画都市として熟成する中、ここに暮らす人々も増え、2018年4月みなとみらい本町小学校が開校しました。MMジュニア編集局は、みなとみらい本町小学校に編集部を置かせていただいています。このまちの多様な魅力を小学生から高校生までのジュニア記者が、こども目線で伝えます。MMジュニア記者の活躍にご期待ください。

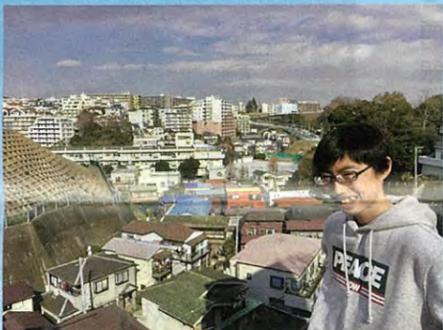
ジュニア記者が選ぶ、お気に入りの風景

MMジュニア記者に、すきなまちの写真を撮ってもらいました



▲空に続くエスカレーター

私のお気に入り、マークイズみなとみらいの外側にあるエスカレーターです。まるで空に向かって登っていくジェットコースターに乗っているような感覚になりとても気持ち良いです。晴れた日は青空とランドマークが見えて特にオススメ。



▲みはらし公園から宮ヶ谷を望む

西区浅間台にある、みはらし公園から小さい頃に住んでいた宮ヶ谷を見下ろした風景です。宮ヶ谷という地名は、浅間神社の傍にある谷という意味に由来します。麓には宮谷小学校。奥には浅間下から三ツ沢に続く曲がりくねった坂道が見えます。



▲山下公園からの風景

戦後から変わらず横浜を見守ってきた、ホテルニューグランドは、とても趣があり歴史が感じられます。異国情緒あるカフェでゆっくりできたら素敵だなあと思いながら写真を撮りました。



▲横浜美術館のライトアップ

みなとみらいの中で好きな所は、「横浜美術館の前のライトアップ」です。冬限定で写真を撮るのに良いスポットでもあり、周りに光が反射して、きれいな景色を見られます。

▲輝く日本丸

みなとみらいの夜景です。とてもコスモワールドの観覧車がアクセントになっています。日本丸がとてもきれいに光っています。

▶みなとみらいの日本丸

船齢88年を越えた日本丸が大規模修繕中です。補修と塗装のため20年ぶりにドック内の海水を全て排水しています。注水は3月中頃の予定です。貴重な機会なので是非見に行ってみてください。



▶モクモクワクワクヨコハマヨーヨー

このシンボル何だろう?と知っている人も多いのでは? このシンボルはたなびく雲をイメージしてつくられたそうです。このシンボルがいつもみなとみらいを見守っていて、みなとみらいの象徴だと思ったのでこれを紹介したいと思いました。

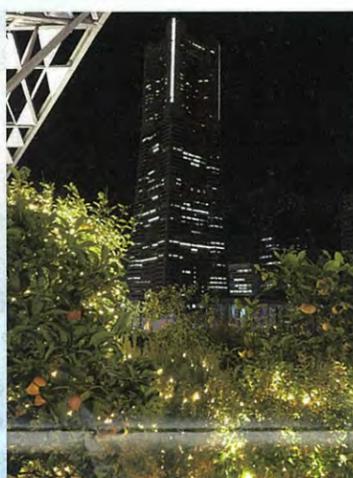
▶MM線「元町中華街」の駅舎の屋上に広がる「アメリカ山公園」

建物の屋上が公園になっていて、初めて来た時はびっくりしました。なのでこの公園は、山手の丘に向かう人たちの動線になっています。私は、ここで父と一緒にウチキパンのかレードーナツを食べるのが好きです。



▶「みんなの庭」から見えるランドマークタワー

「たくさんの人に自然とのつながりを体感いただきたい」というコンセプトで作られたマークイズみなとみらいの屋上にある「みんなの庭」から見えるランドマークタワーの景色です。ここから見えるランドマークタワーと、ライトアップされた美術館前の夜景がきれいで、みなとみらいの自慢の景色だと思うので紹介します。写真を撮った時は、庭の木々には大きなミカンがたくさんなっていて、甘酸っぱい香りがこの庭中に立ち込めていました。このミカンのオレンジ色と鮮やかにライトアップされたランドマークタワーの夜景のコラボが素晴らしい、この写真を撮りました。



▶ランドマークを見上げてみたら

これは、美術館の前から撮った写真です。美術館の前は夜になると、ライトアップされ、幻想的になります。そんな木と一緒に写っているのは、ランドマークです。正面から見るといいのですが、この角度からの景色は格別です。



▲横浜の観光名所を走る「あかいくつ」号

JICAという建物の前を歩いていた時にたまたま走っていたので撮影しました。赤とベージュの色が鮮やかで窓ガラスがレトロで可愛いです。このバスに乗ると桜木町から大磯まで、キング、クイーン、ジャックの塔や、横浜中華街、港の見える丘公園、マリントワーなど、たくさん名所を見ることが出来ます。たくさんの方にこのバスに乗って横浜を回ってほしいです。



▲窓からのみなとみらい

部屋のシャッターを閉めるときに、ランドマークと観覧車が見えました。明かりがきれいだったので近所の公園まで行って写真を撮りました。



「横浜みなと博物館」にたくさんの人に来て欲しい!

記事:角田 和瑛



ぼくたちは、日本丸の横にある、横浜みなと博物館にいき、学芸員の奥津さんに案内してもらいました。普段見ることのできない裏側に入ると、巨大な書庫があり、そこには約2万5千冊の本がありました。それらの本はみなと博物館に勤務している学芸員の人、読み、新たな資料を見つけ、展示するためにあります。学芸員の人には今ある2万5千冊の本をほぼ読んでおり、その内容が頭に入っているといひます。ぼくも本が好きで200冊以上は読んでいたのですが、どんな内容だったか忘れてしまうこともあります。学芸員の人はずいと思ひました。

その他、おどろいたことは、掃除をする人のこと。とても広い博物館なのに2人で掃除してしまうというのです。今回の取材で博物館の裏側など、貴重な場所をみせてもらい、とても楽しかったです。この貴重な体験を広め、横浜みなと博物館のよさをたくさんの人に伝え、たくさんの人に来てもらいたいと思ひました。

(2018.8.25)

みんなのシンボルランドマークタワー

記事:山本 未来

ランドマークタワーは、72階まであって、オフィスやショッピングモール、展望台、ホテルなどがあります。このビル内のオフィスでは、約1万人も働いている人がいると聞いて、とてもびっくりしました。今回一番気になったのが、安全についてです。地震や火事、事故、台風などの対策はどうやっているのかな、とてもたくさんの方が訪れるビルでは、どんな工夫をして守っているのかなと思ひました。まず、防災センターではモニターで、事故などが起きていないか交代で確認しています。さまざまなところに防犯カメラが置いてありました。



その防犯カメラの映像をたくさんモニターでいつも見ているそうです。そして、夜になると全部の扉に鍵をかけてパッシブセンサーというもので、動きを感じたら、人が入ったということで反応があり、すぐにつけられるようになっていひます。火事の際には、火災探知機が3つのレベルで知らせてくれます。もし、火事が広がってしまったら、シャッターを閉じて防ぎます。

さらに、ランドマークタワーは、強風で揺れてしまう、ということを知りました。そのため、ランドマークタワーの屋上70階には大きな振り子が対角線にそって2つあります。その重さは1つ170tもあるそうです。ランドマークタワーが揺れると、反対方向に振り子を揺らし、バランスをとるのです。(2018.9.19)

熱供給のひみつ

記事:出口 遼馬



みなとみらい熱供給とは、みなとみらいの地域ほとんどの建物に冷暖房に使う蒸気と冷水を送っている会社です。地域導管という管がみなとみらいの地下を通っていて、その管を使って社内で作った蒸気と冷水をみなとみらいの建物に届けていひます。

熱供給では、ガスや電気を使ったさまざまな方法で、蒸気と冷水が作られていひますが、その中から2つ紹介しひます。冷房では、普通の水なら凍ってしまう温度でも、凍らない特別な液体を使って、水を冷す方法。暖房では、ボイラーという、大きなやかんのような機械でガスを燃やし、400度近くの熱い蒸気を作る方法などがあります。建物で使い終わり、水に戻ってしまった蒸気と、ぬるくなった冷水を回収しボイラーや冷凍機で蒸気、冷水に戻しひます。冷暖房がこんな風に作られていひることを知っていひましたか?冷房・暖房を使うとき、少し熱供給の事を思ひ出してみてください。(2018.10.17)

横浜銀行のすすめ

記事:橋本 みなみ

2020年で創業100年を迎えるという、横浜銀行の本店に行きました。横浜銀行は大きな統合がないまま、ここまで成長してきたそうです。銀行に



は主に3つの仕事があります。お金を預かる、貸し出す、の2つは知っていひましたが、3つめのお金を送るという仕事は知りませんでした。このお仕事のおかげで私たち利用者はATMで遠い人にお金を渡すことができますし、また大金を手渡しで渡す必要がなくなりました。お給料はこのATMをつかって、大方渡されるので、不可欠で社会のしくみを担う大切な仕事だと思ひました。

ところで、銀行のトップの役割の方々を「頭取」と呼ぶ理由は知っていひますか?頭取と呼ばれるようになったのは、2つの説があります。雅楽の演奏における、主席演奏者を称する「音頭取り」に由来する説と、「筆頭取締役」の略称に由来する説です。銀行はお金が生まれてからずっと不可欠で、名称は違えども存在してききました。

本店の前には、ひときわ目を引く高田洋一さんの「水面の鳥」という赤い作品があります。なんとこの彫刻、風を受けるとゆっくり回転するしくみです。ぜひ一度これを見に行つて、歴史ある横浜銀行の本店に足を踏み入れてみましよう。ビル内にある大きな水時計は美しく、つい長い間見てしまいます。私のオススメです。

(2018.10.3)

ゆかいな縁市

記事:中沢 璃帆



グランモール公園で行われた「みなとみらい縁市」に行つてきました。「陶磁器工房器楽」では、電動ろくろ体験コーナーがあり、ジュニア記者の1人が代表で体験しました。お店の方がやっているのを見るとかんたんそうに見えましたが、ジュニア記者にはとても難しそうです。売っている物も作るのがとても難しそうです。猫や人形のかわいいはしおきがあり、猫のうらにはそれぞれの名前がついていて「トトロ」の様な色をした子

の名前は「トトロ」ミケネコは「ミケ」というかわいい名前がついていひました。

キッチンカーで参加していひる「からあげ専門店すていっ手羽」は夫婦でお店を営んでいひました。からあげのころもは、カリッとしていひて、中はとてもジューシーで言葉で全てを表わせない程おいしいというより、完璧なからあげでした。

最後に取材したのがバンザイ LIFE というバンドです。なんとメンバーは、プレーメン商店街で働いていひる人々なんです。今回の縁市では、「プレーメン音頭」、「パターン」などの曲を歌っていひました。どの曲も聞いていひてとても楽しいです。

今回、私は縁市に行つて、みなとみらいのことをより知ることができてうれしかったです。(2018.12.1)

街のシンボル「横浜美術館」

記事:村田 ころこ



横浜美術館に取材にいひき、普段はみることのできない特別な部屋を見せてもらひました。

一つ目は、中央監視室です。ここでは24時間365日、館内の警備や、温度や湿度の管理をしていひるそうです。美術品に「最適な温度は22度くらい、湿度は55%くらいだと教えてもらひました。もし停電になつても10時間くらいまでは自家発電ができるそうです。横浜美術館では、いままでに一度も作品を盗まれたことがありません。それはきちんと管理されていひるからだと思います。

二つ目は美術品の搬入口です。美術品を積んだトラックから、展示室や保管庫へ、安全でスムーズな移動ができるしかけがたくさんありました。たとえば、トラックの荷台の高さまで大きなリフトが移動し、美術品をスムーズに乗せることができる、などです。そのほかにも美術に関する11万さつもの蔵書がある図書館や、一般の人が美術を学ぶためのアトリエを見学しました。

今回、本当は入ることができない場所をたくさんみせてもらひて、とてもうれしかったです。とくにこの美術館がみなとみらいで一番古い建物だということにびっくりしました。

(2018.11.24)



FMヨコハマでの貴重な体験

記事:山口 あい



FMヨコハマは、1985年12月20日に誕生したラジオ局で、朝6時から夜の11時まで、みなとみらいのランドマークタワーの中にあるスタジオから、生放送をしています。その生放送をしているスタジオを取材する貴重な体験をすることができました。FMヨコハマは、^{はたの} 藤野市の大山というところにアンテナを置き、電波をとばして、横浜だけでなく、神奈川エリアを中心に、栃木県や埼玉県までも届いています。

今回私たちは、15時から19時まで、生放送中の「Tresen」を見学させていただきました。DJの植松さんとさんまさんのお嬢様の IMALUさんが生放送しているところと、ニュースキャスターがニュースを伝えているところを見ることができました。植松さんと IMALUさんがお話をすこくなめらかにしていたので、感心しました。また、毎朝ラジオで聞いているニュースをニュースキャスターが話しているのを間近で見ると、耳に聞こえてくるだけではなくスタジオで原稿を^{けんこう} 読んでいるキャスターも目で見えて、いつもとは違った聞こえ方でした。

他にも、6万枚もあるCDライブラリーや、録音するちいさめのスタジオや、番組を編集をするスタジオも見ることができ、実際にスタジオの中にはいり、ヘッドフォンをつけて、写真も撮るといって、貴重な体験もできました。本当のスタジオで取材をすることができ、これからはもっと楽しく聞くことが出来そうです。(2019.1.15)

すごい！神奈川のFMヨコハマ

記事:小林 廉

FMヨコハマは、1985年、12月に生まれたラジオ局です。基本的に、



朝～夜の24時間、日曜日の夜中を^{のぞ} 除いて、ずっと放送しています。FMヨコハマは、「大山送信所」からラジオの電波をとばしています。総務省から放送免許をもらって、神奈川県を中心にラジオ放送をとどけています。放送は、神奈川県だけでなく、関東全域までギリギリとどけています。

ぼくは、最近ラジオをきいています。今回取材して、ラジオをもっと聞きたくなりました。(2019.1.15)

富士通エフサスのよいところ

記事:長谷川 綾

富士通エフサスは、サービスや技術を提供する会社です。ICT(Iはインフォメーション(情報)Cはコミュニケーション(通信)、Tはテクノロジー(技術)という意味)をつかって、将来どんなものが^{ほんばい} 必要なかを考える会社です。

富士通エフサスではお客様がどのようなことを考えているかの真実を引き出したり、それに気がついて伝えたりするお仕事もしています。

そのような仕事をするとき、多様性を大切にしながらコミュニケーションをたくさんしたり、ワークショップでレゴなどをつかって、頭の中をやわらかくしたり、整理したりするときもあるそうです。

昔は馬車道で、『教育』をメインの仕事をしていました。今はここ、みなとみらいのクイーンズスクエアに移転しましたが、それは貿易港、みなとみらいという^{ふんいき} 雰囲気、富士通エフサスがやろうとしていることが、合っていたからです。会社らしく見えない、家の居間のような雰囲気を作ったのは、本音が自由に言えるようにしたいと思ったからです。この場所は、窓からよく花火が見えたり、太陽がさんさんと入ってきたりして、いい場所です。



富士通エフサスのこだわりは、自分の会社がもうかる、というだけではなく、みんなも自分も得するように、ウィンウィンになるようにサービスを提供して、お客さんが得ることを考えたいと思っていることです。人が好きな人が大前提で、そういう人に向いている会社だということでした。(2019.1.19)

Cafeあにみに行きました！

記事:丹治 陽貴



ぼくは、アニメはすごいところだと思います。なぜならアニメは、障がいのある人がつくったパンやアクセサリなどを販売して、障がいのある人をサポートしているからです。カフェ内に、横浜市の前副市長の書いた絵がかざってあったことにびっくりしました。その絵は夕焼けのみなとみらいの景色を描いたもので素敵だと思いました。前副市長がアニメのやっていることを^{おうえん} 応援しているということなんだな、と思います。

ぼくたちはお昼にいったので、みんなでランチを楽しみました。ここで出しているカレーと、障がいのあるひとが作ったパンがおいしいので、ぜひ行ってみてください。特にぼくは特製アニメカレーがクセになる美味しさでおすすめしたいです。(2019.1.19)

あにみはすごいカフェ

記事:矢吹 昊大



ランドマークタワーのすぐ近くにある、クロスパティオの中にある、アニメというカフェに取材に行きました。代表をしている、服部たろさんという、車椅子の方が取材に答えてくれました。この施設では、障がいのある人たちの作品を展示して販売したり、作品をつくる作業などもして、カフェの運営もしています。障がいがあってもとても元気で僕はすごいと思いました。アニメのカレーはすごくおいしかったです。僕はとても尊敬したいと思いました。(2019.1.19)

豊かな体験を通した学びフォーラム

記事:山本 承太郎

皆さんにとって豊かな体験とはどのようなものでしょうか。楽しかった体験や悔しかった体験、何か新しいことに挑戦した体験、など体験と言っても人それぞれです。けれども、それらの体験を経験した後、僕たちは必ず成長していると思います。これからの未来、僕たちはどんな豊かな体験をして行けばよいのか、そんなことを考えた取材でした。

富士通エフサスのオフィスでは、さまざまなイベントが開かれています。今回取材したのもその1つで「豊かな体験を通した学びフォーラム」という学校の先生主催のイベントでした。子どもに豊かな体験してもらうために、まずは周りの大人が豊かな体験をしてさまざまなことを感じよう、というのがイベントの目的でした。この日は多くの先生だけでなく、たくさんの企業の方々も参加していましたが、僕たちジュニア記者に気軽に声をかけてくださり、楽しく参加することができました。

最初に心をほぐすアクティビティをしました。4つのグループに分かれ、「私、あなた」と言いながらグループの誰かを指してどんどんつなげるゲームや、ストーリーになっている絵を一人一人が持ち、英語だけで順番に並べるゲームなどをしました。大人たちが小学生のような遊びを真面目にやっている姿を初めて見て、少し驚きましたが、ゲームが終わったときには自然と参加者の距離がちぢんでいました。



太陽住建という会社の河原社長から「学校教育と企業の関わり」についてのお話が終わった後、全体でワークショップをしました。6人ほどのグループを作り、1つセッションが終わるごとに全員が他のグループに旅立つというワールドカフェ形式でした。さまざまな立場の人たちが自分、または他人の豊かな体験について考え、それを国連で決められたSDGs(持続可能な開発目標)にてらし合わせました。こんな見方もあるのか、そんなとらえ方もあるのか、と驚きの連続でした。

(2019.1.19)

いくつ正解できるかな？ MM ジュニア

大人も子どもも挑戦してみよう クイズコーナー



クイズの答えはこちら→
<http://mmjr.minicity-plus.jp/2019/02/10/690/>

中面の記事にヒントがあるクイズには★をつけました

Q1 帆船日本丸と同じ、日本丸メモリアルパーク内にある博物館は？

- ★ 1. 安藤百福博物館 2. 横浜みなと博物館
3. 日本新聞博物館

Q2 次のうち、みなとみらいエリアでいちばん古い建物はどれ？

- ★ 1. 横浜銀行本店 2. ランドマークタワー
3. 横浜美術館

Q3 横浜市西区に2018年新しく生まれた小学校はなんというでしょう？

- ★ 1. みなとみらい小学校 2. みなとみらい本町小学校
3. 新高島小学校

Q4 横浜銀行本店にある大きな時計はどんな時計でしょう？

- ★ 1. オルゴールのからくり時計 2. 大きなハト時計
3. 大きな水時計

Q5 マリントワーの高さは何メートル？

1. 106メートル 2. 110メートル 3. 120メートル

Q6 横浜ランドマークタワーは何階建てでしょう？

- ★ 1. 63階 2. 70階 3. 72階

Q7 西区と中区には同じ町名があります。いくつあるでしょう？

1. 1つ 2. 2つ 3. 3つ

Q8 西区が、横浜市の中で1位なのはどれでしょう？

1. 住んでいる人の多さ 2. 働いている人の多さ
3. 面積の広さ

Q9 みなとみらい線の西区にある駅はいくつあるでしょう？

1. 2つ 2. 3つ 3. 4つ

Q10 西区は生まれて何年目？

1. 70年 2. 72年 3. 74年

ジュニア編集局 サポーター募集

子どもたちと一緒にSDGs、持続可能なまちづくりに取り組みませんか？
この活動は、SDGs 11「住み続けられるまちづくりを」に取り組む活動です。



取材の様子 子どもたちの活動を応援してください！



富士通エフサス



FMヨコハマ



横浜みなと博物館



横浜美術館

編集後記

みなとみらい
本町小学校での
編集会議のようす



みなとみらいエリアの魅力を子どもたちに取材してもらい、発信していく活動を、月1回の編集会議(主に土日の午前中)で楽しく行っています。まちを取材し、まちを愛する子どもたちが増えることは、持続可能なまちづくりにつながります。ぜひこの活動を応援してください。

NPO法人ミニシティ・プラス スタッフ一同

■ 1口3000円(1年間)から活動を支援してくれる、個人サポーターを募集します。

- ・サポーターの方には、年4回程度メルマガで活動をお知らせします。
- ・年1回発行の新聞をお送りします。
- ・サポーターの方は、希望すれば編集会議や取材を見学できます。(人数に制限があるので、事前にご相談となります)

■ 1口12000円(1年間/月1000円)から、活動を支援してくれる企業・団体サポーターを募集します。

- ・当HP(つづき・MMジュニア編集局)のページに社名やロゴなどを掲載させていただきます。
- ・サポーターの方には、年4回程度メルマガで活動をお知らせします。
- ・年1回発行の新聞を希望部数(ご相談の上)お送りします。
- ・取材のご希望があるときには、ご対応検討します。
- ・サポーターの方は、希望すれば編集会議や取材を見学できます。(人数に制限があるので、事前にご相談となります)

■ お問い合わせください

045-306-9004(担当:岩室晶子) minicityplus@gmail.com

創刊号 2019年(平成31年)2月発行

編集 MMジュニア編集局

発行 NPO法人ミニシティ・プラス

<http://mmjr.minicity-plus.jp/>

(e-mail minicityplus@gmail.com)

協力 みなとみらい本町小学校

MMジュニアタイムズは、みなとみらい21エリアマネジメント活動助成事業を受けています





こどもがつくるこどものまち

ミニヨコハマシティ

in 港北みなも

2019.3.30-31(土・日)



★ミニヨコハマシティに入れるのは、「19才以下」で「ひとりでまちに入れる人」です。

3.31 同時開催：かながわ子ども合衆国マルシェ(裏をみてね)



1. 1かいでうけつけ。
2. ミニヨコがっこうでまちのしくみをおしえてもらう
3. ジョブセンターでおしごとをさがして、はたらく(おしごとは30分単位です)
4. おしごとがおわったら、ぎんこうで「ミニヨン」をもらう
5. かせいだ「ミニヨン」であそんだり、かいものしたり

ミニヨコハマシティの市長に立候補したい人は、3月28日までに下記に連絡してください。こちらから折り返し返事をします。
NPO法人ミニシティプラス
045-306-9004
minicityplus@gmail.com

合衆国マルシェ
神奈川県各こどものまちから、それぞれのまちの自慢のお店を開くマルシェです(ぐわしくはうらをみてね)

こしは“港北みなも”に出現するぞ

ミニヨコハマシティin こうほくみなも

日時★ 3月30・31日(土・日)
30日(土) 13:00-16:00 まちをつくる日
31日(日) 10:00-16:00 ミニヨコハマシティ本番
(両日とも入場15:00まで)
※ かながわ子ども合衆国マルシェは、31日 11:00-16:00

参加費★ 1日券 300円
2日通し券 500円

予約優先

参加できる人は19才以下で、保護者なしで参加できる人です。
大人の参加や小さいおこさまの参加の方法については裏面をごらんください!

受付★ 港北みなも 一階
市営地下鉄「センター北」「センター南」徒歩約5分
バス(東急)「区役所通り中央」又は「横浜市歴史博物館前」下車すぐ

参加の事前申し込みを受け付けます!

予約フォーム <http://bit.ly/2HwmwhA>
こちらから事前申し込みをしてください →→→
当日うけつけで市民証をお渡しします。
参加人数が多すぎる場合、当日入場できない場合があります。なるべく事前にお申し込みください。



主催：NPO法人ミニシティプラス
minicityplus@gmail.com 045-306-9004 (水曜休)
共催：田園調布学園大学
協力：港北みなも / 都筑区役所 / 都筑警察署 / カゴメ株式会社 /
カップヌードルミュージアム / NPO法人I Love つぎ / YOKOHAMA ACTION PLANNER
後援：都筑区役所 / 神奈川県 / こども環境学会 / キッズデザイン協議会



同時開催

かながわ子ども合衆国



神奈川県下で行われている、たくさんの「キッズタウン(こどものまち)」があつまり、「かながわ子ども合衆国」としてサミットを実施しています。

2018年に最初のサミットが田園調布学園大学で行われ、こども大統領、副大統領が選ばれました。かながわ子ども合衆国は、「キッズタウン(こどものまち)」がおたがいに交流することで、ノウハウを共有しあうこと、また、このような取り組みを多くの人に知ってもらうこと、を目的にしています。現在13の「キッズタウン(こどものまち)」が協力しています。

2019.3.31(日) 港北みなも1F

今回合衆国マルシェに参加するキッズタウン(こどものまち)

★かながわ子ども合衆国マルシェ 11:00-16:00

かながわ子ども合衆国のこどもたちが、各まちのじまんのお店を開きます!ぜひ見に来てください。

こちらは現金での販売になります。こどものまちの通貨は使えませんのでご注意ください。

★かながわ子ども合衆国大統領選挙 15:00-16:00

かながわ子ども合衆国の子どもの代表を選ぶ、大統領選挙が行われます。選挙に参加はできませんが、どなたでも見学できます。各まちの代表が立候補し、演説し、投票が行われます。白熱する選挙をぜひ見に来てください。

キッズタウン(こどものまち)の名称	主催団体	開催地
オルタナティブキッズ(ミニしんよこはま)	NPO法人フォーラム・アソシエ	横浜市
こどもがつくるまち・ミニたまゆり	田園調布学園大学	川崎市
こどもタウン葉山	一色大滝商店会	葉山町
チツチェーノ・チッタ	チツチェーノ・チッタ運営本部	横浜市
ぷち おおいそ	NPO法人未来経験プロジェクト	大磯町
ぷち なでしこ		平塚市
ぷち やわた		平塚市
ミニシティさがみはら	スマイルミニシティプロジェクト	相模原市
ミニヨコハマシティ	NPO法人ミニシティ・プラス	横浜市
こどものまち「ゆめゆめシティ」	社会福祉法人こどもの国協会	横浜市

かながわ子ども合衆国のお問い合わせ先 田園調布学園大学 かながわ子ども合衆国事務局

電話:080-3214-8131 メール:fujiyama@kanagawa-kids.jp HP:http://kanagawa-kids.jp/

ミニヨコハマシティについて・・・大人の方へ

ミニヨコハマシティは、ドイツのミニミュンヘンをモデルに、2007年に横浜市子ども青少年局の委託事業としてスタートした大人口出し禁止、19才以下のこどものまちです。今回のミニヨコハマシティは、商業施設「港北みなも」の協力を得て、行います!!ミニヨコハマシティは、子どもたちの自由な発想でつくられたこども主体のまちですので、「スムーズにいかなくてお待たせしたり」「オープンと同時に開店できなかつたり」いろいろなことがおきます。大人スタッフは全力で相談にのり、サポートしますが、基本的には子どもたちが自分の力で考え、がんばり、解決していくことが大切と考えています。温かく見守っていただければと思います。

★こどものまちのスケジュール

予定は変わる
こともあります

・受付は港北みなも1Fです。

今回は事前予約が優先になります(表面に詳細)

当日参加の方は、人数が多くなってしまった場合、入場をお断りする場合があります。あらかじめご了承ください。

3月30日13:00~受付開始 3月31日10:00~受付開始。

15時受付終了。16時イベント終了です。

・ミニヨコハマシティ市長選挙

3月31日11:00~11:30 市長立候補者演説会

14:30~当選者発表・所信表明演説

*市長に立候補したい19才以下の人は、以下に連絡してください。

★大人が買えるチケット「シニヨン」1枚100円もあります

大人のかたや、ミニヨコのまちにひとりで参加できない小さいなおこさまはチケットを購入してお楽しみください。

シニヨンが使えるお店は目印がついています。すべてのお店で使えるわけではありません。

よくある質問

Q:一日中遊べますか?

A:お店でアルバイトすれば、まちでつかえる通貨「ミニヨン」が、かせげます。ミニヨンで、一日あそんだり、買い物したりできます。

Q:何才から参加できますか?_

A:ひとりで参加できるこどもであれば、年齢制限はしていません。いままでに4才で参加したこどももいます。大人と一緒にシニヨン1枚100円を購入して楽しむこともできます。シニヨンが使えるお店は表示します。

Q:お昼ごはんはたべられますか?

A:合衆国マルシェでパン(150円~)やチャーハン(300円~)なども販売する予定です。また、港北みなもにも飲食店がたくさんありますので、ぜひご利用ください。フリースペースには限りがありますが、食べることはできます。

お問い合わせ先:

NPO法人ミニシティ・プラス 045-306-9004 E-mail: minicityplus@gmail.com